第1篇　概説－房総における先土器文化の概要と変遷－

鈴　木　道之助

1　はじめに

房総地域における先土器時代の研究は、昭和29年5月の杉原荘介氏による市川市丸山遺跡の発掘調査を嚆矢とする。我国で始めて縄文以前の文化が確認された群馬県岩宿の調査から5年目であった。杉原氏は岩宿以後、東京都茂呂（昭26）、長野県上ノ平（昭28）と相次いで発掘調査を行い、昭和28年には岩宿文化Ⅰ・Ⅱ→茂呂文化→上ノ平文化と日本における先土器時代石器文化の編年試案を打出しているが、丸山遺跡の切出形石器を含む石器群は、その直後に調査された群馬県武井遺跡の成果とともに積極的にとり入れられている。すなわち、丸山石器文化を茂呂石器文化か、武井Ⅱ石器文化の一面の姿にしかすぎないかも知れないと躊躇しながらも、刃器文化から尖頭器文化への過渡期のものと捉えたのである。しかし、丸山遺跡以後は、昭和43年から44年にかけてのやはり杉原氏らによる市川市殿台、今島田の両遺跡の発掘調査に至るまで、実に14年間に及ぶ長い空白期間を生じている。これは先土器時代の研究者が少なかった為でもあるが、全国でも最も貝塚の多い地域という本県の特殊な事情もあり、学問的な志向が主に縄文時代に向けられたこともその一因であろう。

さて、殿台、今島田遺跡を皮切りに県内の先土器時代の発掘調査例は爆発的な増加を見せ始める。それは同時に首都圏の拡大が本格的に下総台地へ進出してきたことを意味するのであるが、重機によって根こそぎ遺跡を殲滅してしまう開発の前には、研究者の学問的志向は全く反古となり、あらゆる時代に対処しうる調査の方法が必然的に必要とされた。成田ニュータウン、新東京国際空港用地内、千葉ニュータウン関係の大規模な調査班が県教育庁文化課を中心に組織化されたのもこの頃である。調査規模がそれ以前とは比較にならない程大形化しており、先土器時代遺跡の発見も時間の問題であったが、まず新東京国際空港用地内でNo.14、No.51、No.52、No.55の4遺跡が発掘調査された。発掘面積、深度とも遺跡面積に比し著しく小さいものではあったが、県の行政関係者として初めてローム層に科学的なメスを入れた担当者の積極的な姿勢は高く評価されよう。No.55遺跡の発掘は特に重要であり、立川ローム層の第2黒色帯の下部より局部磨製楕円形石器、ナイフ形石器、スクレイパー、彫器、刃器状剝片が出土した。石器の集中出土地点（以下ユニットと呼称する）に隣接して大量の木炭の検出もあり、C_{14}年代によれば29,300±980年という年代が与えられた。ナイフ形石器は刃器状剝片を素材としたものであるが、東京都西之台遺跡Ⅶ層、鈴木遺跡Ⅹ層のナイフ形石器等とともに我国でも最も古く位置づけられるものである。次いで昭和46年から51年にかけて、東は印旛郡印旛村から本埜村、印西町を通って西は船橋市北部から東葛飾郡白井町に及ぶ長さ約17㎞、面積30万haという広大な千葉ニュータウン内の調査が行われ、13遺跡の先土器時代の遺跡が相次いで発掘された。中でも

瀬戸遠蓮、向原、地国穴台、石道谷津、木苅峠遺跡などは特に重要な遺跡で、向原遺跡では立川ローム層軟質部（ソフトローム）下部より切出形石器が、上部より極めて優れた細石器群が検出され、木苅峠遺跡では25個に及ぶユニットが、３ないし４枚重複した文化層としてみられ、ユニット間の石器の接合関係も捉えられた。また瀬戸遠蓮、地国穴台遺跡では先土器から縄文時代への移行期である縄文草創期の遺物がまとまって検出された。しかし、いずれもまだ発掘面積、深度とも不十分で、僅かに木苅峠遺跡で遺跡の全貌が漸く捉え始められたに止まっている。先土器時代へのとりくみ方がやはり他時代よりも関心が薄く、遺跡による調査の精粗が激しかったとも言える。その頃は神奈川県月見野（昭44）、東京都野川（昭45）という大規模な遺跡の概報が刊行され、従来の先土器時代遺跡の調査のありかたが反省されていた時期であったが、その成果を十分にとり入れた調査が行われなかったことは残念であった。これら諸遺跡の他にも船橋市法蓮寺山、柏市鴻巣（昭47）、富里村南大溜袋遺跡（昭49）の調査も相前後し

第１図　房総における先土器時代主要遺跡

て行われた。南大溜袋遺跡は先土時代終末期の遺跡として注目されるもので多量の尖頭器が検出され、学術調査として実施された数少ない例である。昭和50年度には佐倉市星谷津、千葉市県立コロニー内、富里村東内野遺跡などの発掘調査が行われた。星谷津遺跡は深度面においてもある程度カバーされており、6枚の文化層が確認されている。また立川ロームの鍵層である黒色帯が不鮮明な下総台地において、丹沢パミスという南関東一円に分布する有力な鍵層が発見できたことは、今後周辺地域との対比の上で極めて重要であろう。東内野遺跡は調査面積こそ少ないものの石器点数は極めて多いとのことで、南大溜袋とともに正報告書の期待される遺跡である。

以上、発掘調査例を中心に本県の先土器時代研究史を述べてきたが、未だその歴史は浅く、資料的にも満足すべきものとは言えない。論考にしても小田静夫氏、拙稿があるが、いずれも県内の遺跡、遺物を紹介した程度で漸く端緒についたにすぎない。さて、不十分とは言いながらも、近年の資料の集積はめざましいものがある。本小論では主要な遺跡とその出土遺物について概要を述べ、聊か時期尚早の感もあるが編年的な位置づけを始め、若干の問題について検討を加えてみたい。

千葉県先土器時代関係文献目録

1955　杉原荘介・大塚初重「常総台地における関東ローム層中の石器文化－市川市丸山遺跡について－」駿台史学第5号

1956　杉原荘介『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部研究報告　考古学第1冊

1958　貝塚爽平・芹沢長介「千葉県大房岬のロームと黒耀石片」石器時代第5号

1963　杉原荘介『市川市の貝塚』

1966　湯浅喜代治・戸田哲也・多賀譲治「千葉県松戸市周辺の先縄文文化遺物について」下総考古学3

1967　篠原正「富里村七栄で見つかった細石器」成田史談13号

1968　篠原正「遺跡をたづねて－七栄出土のポイント」成田史談14号

1970　安蒜政雄「先土器時代」『殿台遺跡』市川市文化財調査報告書第2集

1971　西野元「No.51遺跡」『三里塚－新東京国際空港用地内における考古学的調査－』

杉山晋作・中山吉秀「No.52遺跡」　同　上

西野元・中山吉秀「No.14遺跡」　同　上

古内茂「No.55遺跡」　同　上

杉原荘介「三・原始狩猟文化－先土器時代－」『市川市史』第1巻

1972　斉木勝「下総台地出土の石器」考古学ノート第2号

1973　戸田哲也　「千葉県南大溜袋遺跡の調査」考古学ジャーナルNo.78

斉木勝「（付節）先土器遺物包含層の調査」『小金線－小金線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

1974　宍倉昭一郎「第２章第二項１　縄文以前の文化」『千葉市史』原始古代中世編
宮入和博「成田市大袋金堀遺跡の先土器時代資料」成田市の文化財第５輯
古内茂・矢戸三男『柏市鴻ノ巣遺跡』
立教大学考古学研究会『千葉県夷隅川流域分布調査報告書（埋蔵及び石造文化財資料編）』
高木博彦・千葉健造「向原遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』II
天野努「地国穴台遺跡」　同　　上
鈴木道之助「瀬戸遠蓮遺跡」　同　　上
中山吉秀・西山太郎「大門遺跡」　同　　上
加藤晋平・橋口定志「千葉県勝浦市における発掘調査(1)－長者ケ台高梨遺跡－」考古学ジャーナル　No.98
高橋良助・古内茂「最近発見された先土器時代資料２例」ふさ第５・６合併号
小田静夫「千葉県における先土器文化（1)」史館第４号
鈴木道之助「下総台地における縄文時代初頭の文化」史館第４号
松戸市郷土資料館『先土器時代の松戸』松戸市郷土史料館資料目録Ⅰ
1975　小田静夫「石神第１地点」『臼井南』
高木博彦・西山太郎「石道谷津遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』III
鈴木道之助「木苅峠遺跡」　同　　上
鈴木正男「千葉ニュータウン遺跡群の黒耀石の分析」　同　　上
中山吉秀・古内茂「武西北の台遺跡」　同　　上
鈴木道之助「別所大山遺跡」　同　　上
小田静夫「千葉県における先土器文化（2)」史館第５号
鈴木道之助「千葉県の遺跡」『日本の旧石器文化』２遺跡と遺物（上）雄山閣
栗本佳弘・天野努他『八千代市村上遺跡群』
1976　小田静夫「千葉県における先土器文化（3)」史館第６号
鈴木道之助・西山太郎「雨古瀬遺跡」千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
佐藤克己・鈴木道之助「一ノ作遺跡」　同　　上
中山吉秀・古内茂「高根北遺跡」　同　　上
野村幸希・古内茂「草深六角遺跡」　同　　上
古内茂「船尾白幡遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財報告書』V
古内茂「向原北遺跡」　同　　上
栗本佳弘・菊池真太郎・豊田佳伸『千葉市誉田県立コロニー内遺跡』　―

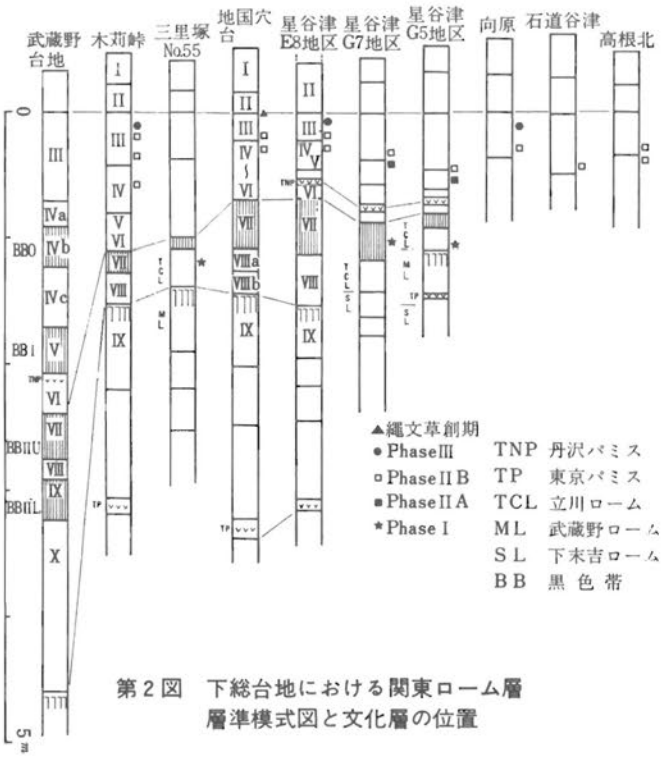
千葉県先土器時代遺跡発掘調査年譜

調査年月日	遺跡名	調査主体	文献
昭 29.5.4～5.6	市川市国府台丸山	杉原荘介	杉原・大塚(1955)
昭 43.10.11～10.30	市川市柏井町今島田	市川市教育委員会	杉原(1971)
昭 44.4.26～5.15	市川市大野町殿台	〃	安蒜(1970)
昭 45.10.27～12.10	成田市 新東京国際空港用地内 No.51	千葉県北総公社	西野(1971)
昭 45.11.10～12.14	〃 No.52	〃	杉山・中山(1971)
昭 45.12.11～昭 46.2.19	〃 No.14	〃	西野・中山(1971)
昭 46.1.15～2.19 (1次)	〃 No.55	〃	古内(1971)
4.7～5.12 (2次)			
昭 46.6.9～6.25	印旛郡印旛村瀬戸遠蓮	千葉県開発庁 千葉県都市公社	鈴木(1974)
昭 46.10.21～12.25	印旛郡本埜村竜腹寺向原	〃	千葉・高木(1974)
昭 47.1.8～4.30	〃 印西町草深地国穴台	〃	天野(1974)
昭 47.6.29～11.30	〃 印西町小林石道谷津	〃	高木・西山(1975)
昭 47.7.1～12.27	〃 印西町小倉高根北	〃	中山・古内(1976)
昭 47.7.14～昭 48.3.31	船橋市藤原町法蓮寺山	日本鉄道建設公団 千葉県都市公社	斉木(1973)
昭 47.7.11～9.24	柏市鴻ノ巣第2次	日本住宅公団 千葉県都市公社	古内・矢戸(1974)
昭 47.10.7～昭 48.3.28	印旛郡印西町浦幡新田木苅峠	千葉県開発庁 千葉県都市公社	鈴木(1975)
昭 47.11.13～11.15	〃 富里村七栄南大溜袋	佐藤達雄	戸田(1973)
昭 48.1.6～3.15	〃 印西町武西北の台	千葉県開発庁 千葉県都市公社	古内(1975)
昭 48.1.11～7.16	〃 印西町草深一ノ作	〃	佐藤・鈴木(1976)
昭 48.1.25～7.4	〃 本埜村角田雨古瀬	〃	鈴木・西山(1976)
昭 48.2.15～8.6	〃 印西町草深六角	〃	野村・古内(1976)
昭 48.3.1～8.6	〃 印西町別所大山	〃	鈴木(1975)
昭 48.8.7～昭 49.1.18	八千代市村上込の内	日本住宅公団 千葉県都市公社	栗本・天野他(1974)
昭 48.10.1～昭 49.1.25	佐倉市臼井南石神第1地点	佐倉市教育委員会 佐倉市遺跡調査会	小田(1975)
昭 49.7.15～8.8	印旛郡本埜村竜腹寺向原北	千葉県企業庁 千葉県都市公社	古内(1976)
昭 49.10.5～12.14	〃 印西町船尾白幡	〃	〃
昭 50.4.30～昭 51.3.25	佐倉市岩富星谷津	千葉県土地開発公社 千葉県文化財センター	――
昭 50.5.24～11.15	千葉市誉田県立コロニー内遺跡	千葉県社会部 千葉県文化財センター	栗本・菊池他(1976)
昭 51.1.4～1.31 (1次)	印旛郡富里村七栄東内野	新東京国際空港公団 佐藤達雄	――
2.9～2.19 (2次)			

2　地理的環境と立川ローム層の層位

地　形　本県は関東平野の南部に位置し、北部は利根川、西部は江戸川を県境とし、南部は東京湾、太平洋に囲まれている。地形的には県南の房総丘陵と県北の下総台地（一部は上総にも及んでいるため両総台地ともいう）からなるが、隣県の茨城県とともに起伏の少ない地域である。南総の房総丘陵はまだ開発の波が及んでいないためか、先土器時代遺跡の発見例は少なく、ほとんどは下総台地で発見あるいは調査されたものである。

下総台地の地形面は最近、杉原重夫氏によって詳しく研究され（杉原1970）、上位の面から順に下総上位面、下総下位面、千葉段丘面と区分されている。下総上位面は下総台地の主体部を構成し、下末吉ロームの全層準をのせ、四街道から松戸へかけての帯状の部分と、印旛沼以北の印旛郡印旛村、同本埜村付近に分布する。平均的高度は25～30 m だが、成田、佐倉、千葉を結ぶ線以東では40 m 前後と高い。下総下位面は東京湾沿岸と利根川下流域に分かれ、高度は18～22 m、下総台地の基盤である成田層が一部削られ、東京湾沿岸では市川砂層、利根川流域では竜ケ崎砂層が1 m 前後堆積し、下末吉ローム層の上半部のみが整合的に重なる。下総上位面とは比高3～5 m の小段丘崖あるいは緩やかな斜面をなす。河岸段丘である千葉段丘はさらに1段低く、台地面とは約5 m の段丘崖によって区別される。千葉市都川流域では、特にこの千葉段丘の発達が良好で、上下2段認められる。



第2図　下総台地における関東ローム層層準模式図と文化層の位置

現在、下総台地で発見された先土器の遺跡は、柏市鴻ノ巣、市川市丸山遺跡を除き殆んどすべてが下総上位面にあるが、調査方法や密度の差異もあり、現状では地形面の差が遺跡の密度に関係するかは速断できない。

層　位　現在、下総台地で発見されている先土器時代遺跡は、すべて関東ローム層最上部の立川ローム層である。下総台地の立川ローム層の堆積は薄く1.5 m 前後であり、武蔵野台地の2

分の1弱、相模野台地の4分の1にも満たない。特に先土器時代の発掘調査において肉眼で識別しうる有力な鍵層として、相模野台地では4枚以上、武蔵野台地では2～4枚の黒色帯（うち2枚は明瞭）が立川ローム層中に見られるが、下総台地では上位の黒色帯（BB1）は殆んど観察不能で、下位の黒色帯（BB2）も千葉市以東にいくと新鮮な露頭面では識別が困難である。この第1黒色帯が確認できないことは、隣接地域との層位的な対比が容易でないことを意味し、ローム層の薄いこととあいまって、編年的な比定を著しく困難にしている。最近、第1黒色帯と第2黒色帯の中間に存在する丹沢パミス（TnP）が注目されており、少なくとも南関東一円という広範な分布域を持つこと、肉眼的識別ができなくとも鉱物段階での追跡が容易であること等から、地域的に生成条件が異なる黒色帯よりもより確実な鍵層として期待されている。今後の分析の進展によっては丹沢パミスが北関東にまで分布域が及ぶことも考えられ、関東地方全域に及ぶ石器群の確実な比定も夢ではない。しかし、残念なことに丹沢パミスの摘出をもってしても先土器時代の大半の部分はその埒外にあるため、より綿密な編年を立てるのにあまり有効な武器とはならない。つまり、丹沢パミスのC14年代は21,220±670年(関東第四紀研究会1974）が与えられており、縄文時代の開始まで、実に1万年もの長期間にわたって、少なくとも下総台地では鍵層を有しないわけである。さて丹沢パミスは下総台地では佐倉市星谷津遺跡で明瞭な堆積が検出された。台地上との比高差約1.5㎞の谷頭から傾斜部では厚さは約6㎝、台地傾斜部から肩にかかるあたりではブロック状となり、台地平坦部では痕跡程度となるが、約40㎝のやや白味を帯びた明かるい硬質ロームの中央よりやや上位に認められる。丹沢パミス上限からのロームの厚さは約60㎝（武蔵野台地は約1.5㎞、相模野台地では約3㎞）、その上半はソフト化されており、下半部よりも明かるい。通常、石器群の上下移動は少なくとも30㎝はあることを考慮すると、層位学的には微細な編年は不可能に近い。また所謂、ソフトロームが丹沢パミスより上位のロームの約2分の1に及んでいることは（傾斜部では3分の2）、平坦地においてすらソフト化された範囲が、相模野、武蔵野台地に比べ、遙かに長期間の文化層を包含することを意味しよう。即ち、同一台地、しかも平坦地における隣接地点でなければソフトローム、ハードロームという区分は殆んど無意味である。

さて、我々はこれまで先土器時代の発掘調査に当って、遺跡毎に層位を別々に呼んできたが、星谷津遺跡の調査以後、下総台地でみられる黒色帯が武蔵野台地における、第2黒色帯に対比されることが層位的に明らかとなったため、層位名を統一して用いることにした。できる限り武蔵野台地の呼称法を採用したが、黒色帯が分離して捉えられる可能性が殆んどないことから立川ローム層下半部は若干、異っている。武蔵野ローム最上位までの層準は次の通りである。

Ⅰ層…表土。　Ⅱ層…黒色有機質土。　Ⅲ層…ソフトローム（但し、既述したように次のⅣ層のかなりの部分、場合によってはⅤ層迄ソフト化されている場合もあり、層位的には余り意味を持たない）。　Ⅳ層…所謂ハードローム、硬質でクラックが発達している。　Ⅴ層…Ⅳ層とは事実上分離できないが、今後市川、松戸、船橋等の下総台地西部での検出は十分予想しう

るので一応区分しておいた。　Ⅵ層…明かるく、やや白味を帯びる、中央よりやや上に丹沢パミスがある。丹沢パミスは新鮮な面では僅かに粘性を帯びているが、乾燥すると白いミガキ砂状になる。火山ガラスが多く、キラキラ光る細粒が多量に含まれている。　Ⅶ層…第２黒色帯（BB２）、粘性が強い。武蔵野台地ではＢＢ２は２分され上位をⅦ層、下位をⅨ層、間層をⅧ層と層位的に３分割している。　Ⅷ層…立川ローム層最下部、やや明るい黄褐色でスコリアを少量含む。　Ⅸ層…褐色ローム。粘性が強い土層でやや軟質、Ⅷ層との識別は容易である。武蔵野ローム最上部で、乾燥するとクラックが著しい。武蔵野ロームは本層以下再び淡褐色の硬質ローム、チョコレート帯を経て下底のオレンジ色の東京パミスに達する。県下における文化層の発見はⅥ層を除き立川ローム全層に及ぶが大半はⅣ層より上位の検出である。

文　献

関東ローム研究グループ（1966）『関東ローム』築地書館

杉原重夫（1970）「下総台地西部における地形発達」地理学評論　第45巻12号

杉原　重夫（1971）「一、地形の発達」『市川市史』　第１巻

杉原重夫・細野　衛（1974ａ）「千葉ニュータウン（地国穴台遺跡）における関東ローム層の鉱物組成について」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』　II

杉原重夫・細野　衛（1974ｂ）「下総台地・千葉－木更津地域の地形と地質」　ペドロジスト　第21回野外見学旅行案内

町田　洋・鈴木正男・宮崎明子「南関東の立川・武蔵野ロームにおける先土器時代遺物包含層の編年」第四紀研究　第10巻４号

関東第四紀研究会（1974）横浜市西部発見の丹沢パミスとその直下の泥炭層Ｃ14年代・地球科学第28巻１号

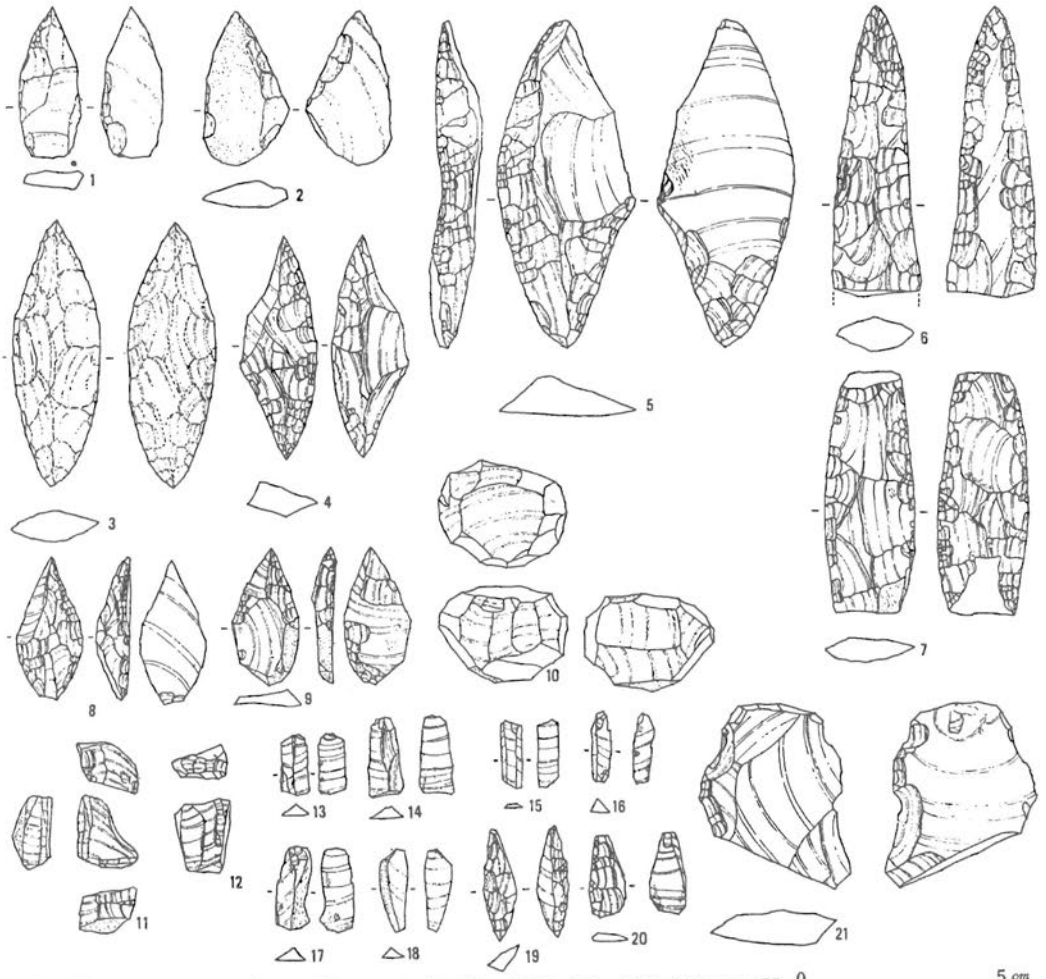
杉原重夫・細野　衛・桃木徳博（1976）「国分寺周辺の自然地理」『南向原－古墳・方形周溝墓・住居址の調査－』　上総国分寺台遺跡調査報告　II

3　主要遺跡とその出土遺物

県下における先土器時代の遺跡は、表採例を加えると優に200遺跡をこえるが、比較的まとまった遺物が発掘あるいは表採された遺跡は昭和51年3月現在、40余か所である（第1図）。

成田市新東京国際空港用地内 No.51遺跡（第3図）　成田市の北側、三里塚に建設されている新東京国際空港用地内において、昭和45年9月から翌46年5月までにNo.51、No.52、No.14、No.55の4遺跡が発掘調査された。遺跡周辺は太平洋に注ぐ栗山川の一支流である高谷川と、佐原市西部で利根川に開口する大須賀川、尾羽根川の支谷によって樹枝状に開析される分水界部にある。No.51・No.52；No.55・No.14はいずれも隣りあった遺跡で、同一台地上にあって小支谷によって区別されるにすぎない。4遺跡とも標高は40m前後である。No.51遺跡はナイフ形石器1、ポイント3、特殊な彫器状石器1、サムスクレィパー3点のほか、若干の剥片、砕片が出土したが、縄文早期の遺物と混在してII層（暗褐色土層）より発見されたものである。ローム内の調査は残念なことに行なわれていない。ポイントは周辺調整のものと両面調整がある。5はナイフ形石器としたが、縁辺の調整はブランティング状ではなく、よりポイントの調整剥離に近いものである。ポイント状の石器の先端にファシットをもつ特殊な彫器状石器もある（4）。ファシットの幅は通常の彫器にくらべ広く、石器面との角度も小さい。また、グレイバーエッジの作出がほとんどなく尖鋭となっており、はたして機能的に彫器としうるか問題はある。むしろ、ナイフとしての用途であろう。かって、木苅型彫器状石器と仮称したもので長野県男女倉（森嶋他1975）で男女倉型彫器、ナイフとされたものと同一である。No.52遺跡、木苅峠遺跡でも検出されており、この種の石器から剥離されたと思われるスポールも検出された。石材はメノウ、玄武岩、砂岩等である。

同No.52遺跡（第3図）　No.51遺跡に隣接し、東西に並んで約4mの間隔を隔てて遺物の集中地点（ユニット）が2個所検出された。東側の第1ユニットからは特殊な彫器状石器1、スポール1、細石核2、細石刃5、刃器状剥片1、調整痕ある剥片1、剥片2点が、第2ユニットからは男女倉型彫器状石器1、スポール1、細刃器2、小形刃器状剥片1、調整痕ある剥片2、剥片2点が出土。いずれもIII層（ソフトローム）上半からの出土である。石材は黒曜石、流紋岩を主体に玄武岩、珪質頁岩、ホルンフェルス、細粒砂岩を若干混える。両ユニット間には共通した原石から製作された石器（同一個体）もあり、ともに細刃器、男女倉型彫器をもち同一のユニット群を形成するものである。男女倉型彫器（あるいはナイフ）は第1ユニットは片面、第2ユニットは半両面調整の小形ポイント状のブランクから作られている。19、20は明らかにこれらのスポールである。19は両面、20は片面調整のものから剥離されている。細石核は打面調整が丁寧であるが、剥離角は急斜な傾向がある。11は細縞状の細刃器剥離痕が直交している。



第３図　三里塚No.51（１～５），No.14（6.7），No.52（８～21）遺跡の石器　0　5 cm

同No.14遺跡（第３図）　ナイフ形石器２、ポイント８以上、小形石核６、細石核３点の他、刃器状剥片、スクレイパー等が出土。暗褐色土層より縄文早期の大量の石器と混在した出土状況でユニットは不明。ローム内の調査は実施されていない。石材は黒曜石、流紋岩が多く、玄武岩、砂岩等を混える。ナイフ形石器は不定形な剥片の一部に簡単なブランティングを施した末期的なもの。ポイントは大形で両面加工のものが多い。石核は玄武岩、珪質頁岩１点を除きすべて黒曜石。

同No.55遺跡（第４図）　No.14遺跡とともに尾羽根川によって開析された支谷の南側傾斜面にある。遺物の層準は下総台地ではもっとも下位で第２黒色帯（Ⅶ層）から下部の立川ローム層最下部（Ⅷ層）である。検出されたユニットは１個で径12ｍの範囲から総数33点の石器類が出土。またユニットの北側にほとんど接して径 120cm、厚さ30cmもの堆積をもつ木炭が検出されたこと

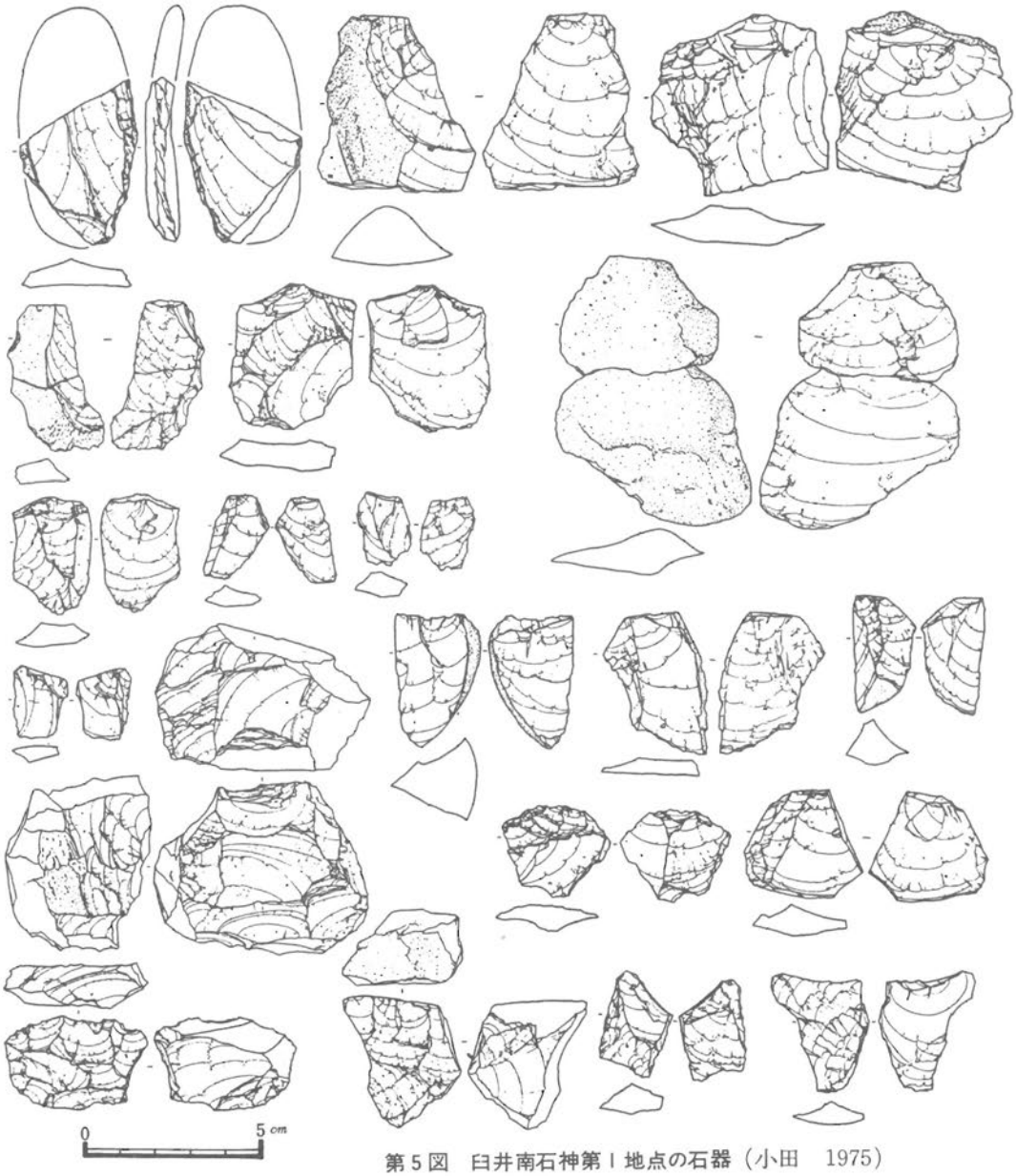
第4図　三里塚No.55遺跡の石器

は重要である。木炭のなかには長さ15㎝ほどの形状の整ったものもあった。材質はクリ、針葉樹の一種、トウヒ属の一種である。石器は局部磨製楕円形石器１、ナイフ形石器１、彫器１、サイド・スクレイパー２、石核１、礫器１、小形の刃器状剥片２、調整痕ある剥片４、剥片・砕片21点である。このほか、上層ではあるが男女倉型ナイフ（彫器？）１点が発見されている。石材は流紋岩が14点ともっとも多く、メノウ、安山岩の８点がそれに次ぐ。砂岩、石英、チャートもある。局部磨製楕円形石器は長さ11.4㎝、幅4.9㎝、厚さ1.8㎝、重量は110ｇ。扁平な細粒砂岩の河原石を原材としている。一面は礫面をそのまま残し、他面は階段状剥離によって調整されるが、部分的に礫面を残す。刃部表裏は研磨されており、左側の一部には鋭いエッジが遺存。刃部中央から右半分は片刃状を呈し、使用による損傷も認められる。ナイフ形石器は安山岩の刃器状剥片を素材。基部には打面を残す。基部周辺のプランティングは両側縁とも急斜だが、背部の調整は微細である。刃部は直線的で長い。石核はメノウを原材、剥片の剥離方向は一定していない。県下では最古の遺跡であるが、既にナイフ形石器を組成にもっていることは重要である。また楕円形石器の完形品の出土は本遺跡のみである。C14による年代は29,300±980、28,700±920年という数値が与えられている。

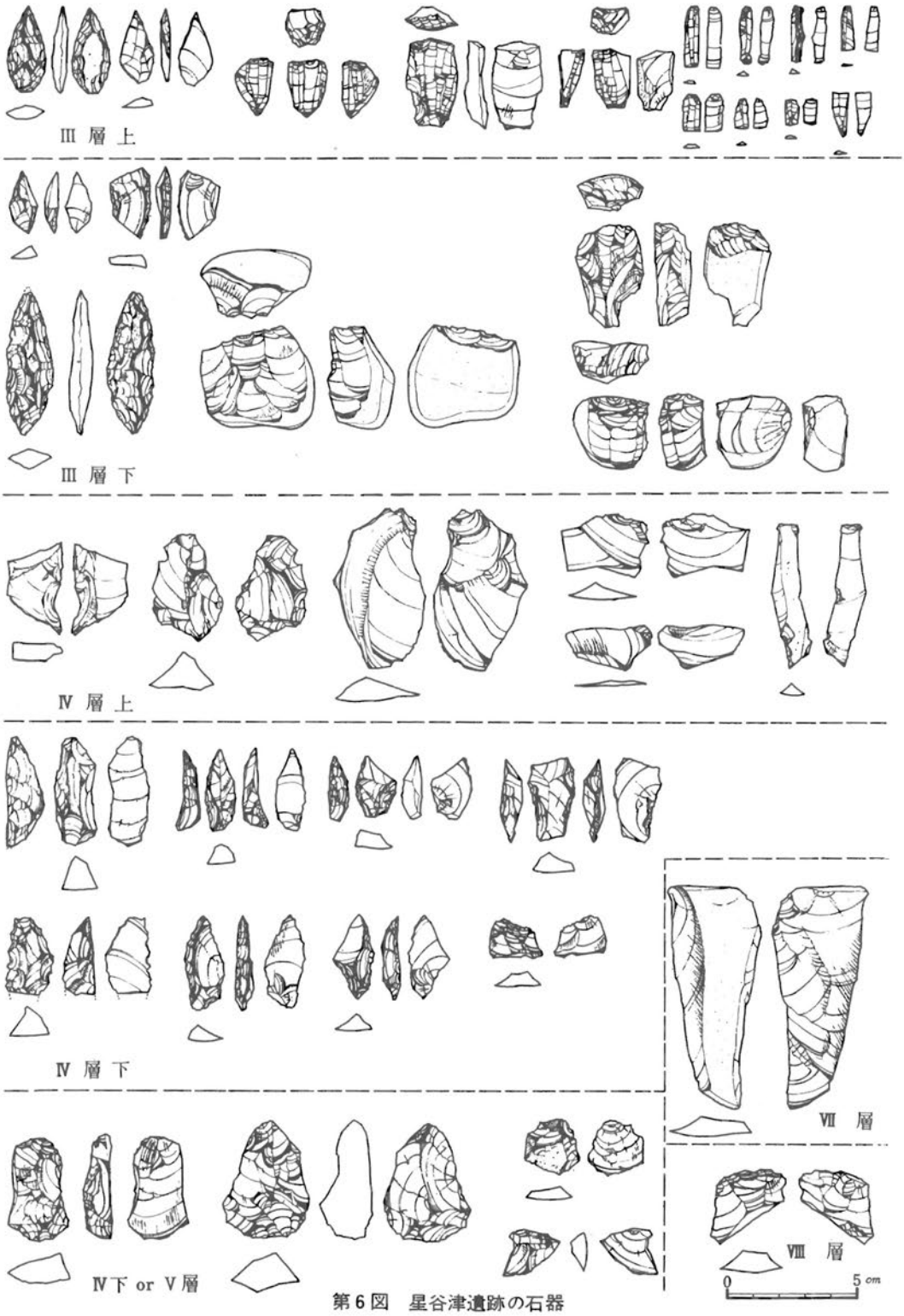
臼井南遺跡（第５図）　印旛沼南岸域の手操川に面する台地に占地。台地の標高は約27ｍで、先土器時代の遺物は西斜面（標高約20ｍ）より出土した。出土層はⅢ層下位とのことであるが、かなりの傾斜面であり、もとより台地平坦部のⅢ層と同一のものではない。石器出土地点の正確な柱状図がなく、せめて鮮明な第２黒色帯の位置がわかれば、より正確な編年的位置づけが可能であったと思われる。Ⅲ層上面から石器の出土地点まで約60㎝あり、傾斜面でのロームの薄さを考慮すると、報告者の指摘通り第２黒色帯以下の文化層のようである。石器は総数25点、内訳は楕円形石器破片１、石核３、剥片21点である。楕円形石器は玄武岩を用い、側縁に打調を加えたのみで、磨製痕はみられない。また自然面を残さないことは通常の楕円形石器とは異なっている。 剥片剥離方法は、三里塚No.55遺跡と類似している。 つまり通常の石刃技法とは異なり、剥離面を打面として、石核を回転しながら剥離を行なっている。但し、三里塚No.55遺跡でみられた刃器状剥片はなく、不定形なものが多い。小田静夫氏は武蔵野台地における立川ローム層最下部との剥離技術の類似性を指摘している（小田・キーリー1973）。

星谷津遺跡（第６図）　印旛沼の南、約７㎞にあり、鹿島川と高崎川に挟まれた狭い丘陵上にある。標高は約40ｍ。鹿島川側より入る支谷が浅いながらも扇形に台地深く浸入しているが、この谷頭の東側及び先端と、反対側の高崎川側支谷寄りの台地上に占地している。昭和50年４月30日から51年３月25日まで発掘調査を実施した。まだ未整理であるため、ユニット数、石器点数等の正確な実数は把握していないがユニットは少なくとも14個はある。うち２個は高崎川支谷寄りの台地に存在した円墳下より発見されたものであり、周溝掘鑿時に破壊されたユニット

もあったと思われ、封土中にも先土器時代の石器がみられた。文化層はⅢ、Ⅳ層に各２枚、Ⅶ、Ⅷ層に各１枚の計６枚である。なお本遺跡では相模野、武蔵野台地で顕著にみられる丹沢パミスが下総台地としては初めて検出された。Ⅷ層は剥片１点のみ。幅広で分厚いやや寸づまりの剥片を折断したもの。切出形石器の素材に類似している。メノウ製。Ⅶ層には先細りで大形の刃器状剥片１、砕片２点がある。刃器状剥片は打面調整なく、直接円礫（玄武岩）より剥離。Ⅳ層下部のユニットは５個、うち１個（Ｇ５地区）は丹沢パミス上15cmの位置にあり、Ⅳ層の薄



第５図　臼井南石神第Ⅰ地点の石器（小田　1975）



第6図　星谷津遺跡の石器

いことを考慮するとⅤ層の可能性が強い。Toolはエンドスクレイパーのみ、この他、石核１、剥片８点が出土した。Ⅳ層下部のユニットはＧ７地区で３個のユニットが１つのグループをなしている。うち１個には円礫数個よりなる小礫群があった。角錐状石器２、ナイフ形石器２、切出形石器３点を含む。ナイフ形石器は小形で素材の形状を生かしたもの。ブランティングは粗い。切出形石器は左刃２点と右刃１点であるが、いずれも刃部側縁に打点がある。つまり剥片剥離の段階で、打面と刃部のなす角度を想定したもの。打面が残置されたものもある。角錐状石器の検出も注意される。断面三角形を呈し、分厚く、裏面には主要剥離面を残し、表面に平坦な粗い剥離を施したもの。南関東では相模野Ⅲ期、野川Ⅳ3a層、西之台Ⅳ下層などに顕著にみられるもので、その形状から「ゴロゴロ」などと通称されている。県下では松戸市中峠遺跡に表採ではあるが類例がある。Ⅳ層下部の石材はチャート、頁岩、安山岩、メノウを多用、黒曜石は少ない。Ⅳ層上部のユニットは１個だが、木炭粒が多数検出された。この他、石器が散発的に出土した地点もある。石器組成は貧弱で剥片、砕片のみ。石材は珪質頁岩。Ⅲ層下部のユニットは5もしくは６個。うち１個は礫群が伴なう。ナイフ形石器２、切出形石器１、ポイント２点とToolは少ないが、整理が進めば実数は増加しょう。石核、剥片はかなり多い。ナイフ形石器は折断手法による小形平行四辺形の終末期的なもの。石材は珪質粘板岩、メノウ、安山岩、チャートであるが、黒曜石のみのユニットもある。Ⅲ層上部のユニットは１個であるが、細石器関係の優れた資料を出土。細石核３、小形石核１、ナイフ形石器１、ポイント１、細石刃42、剥片・砕片95点が検出された。細石核は円錐形のものであるが、縦長の剥片を素材としたものもある。ナイフ形石器は先端を斜めに折断し、急斜なブランティングを施してあるが、基部は簡単な細部加工を施すにすぎない。チャートを主石材とするが、粘板岩もある。

木苅峠遺跡（第７図）　昭和45年９月に開始され、現在まだ調査が継続中の千葉ニュータウン計画区域内の遺跡のうち先土器時代遺跡は13個所を数えるが、本遺跡は最大の規模でユニット数は25個に及ぶ。千葉ニュータウンは印旛沼水系と利根川水系の支谷の分水界をなしている地域で、地形的には印旛沼に連続する神崎川河谷の一支谷によって２分され、東側は下総上位面、西側は下総下位面にあたる。昭和47年10月より翌48年３月にわたって発掘調査が行なわれた。遺跡の標高は23～25ｍ、手賀沼より入る支谷の谷頭南側に位置し、東西を谷頭から入る浅い谷に挾まれた舌状台地にある。調査範囲は２万㎡と広域であったが、実際の発掘面積は6,285㎡にとどまった。発掘深度は所謂ハードローム層上半部までで、これまで報告書等ではⅣＡ層までとしていたのであるが第１黒色帯は不鮮明ながら、佐倉市星谷津遺跡の層準を参考にするとⅥ層上面迄は少なくともユニット群を含む大半の地区で掘り下げてある。

ユニットは台地北面の小支谷に面する傾斜面から平坦部に15個と配礫１個（Ａ地区ユニット群）、小支谷谷頭の奥部に１個、やや中央部寄りに１個あり（Ｄ地区）、反対側の台地縁辺に１個（Ｃ地区）、さらに奥の台地中央部寄りに７個（Ｈ地区ユニット群）が検出された。未掘

の部分も多いのでユニットの実数は完全に把握しきれたとは言えない。石器は総数6,200点余。包含層はⅢ層とⅣ層であるが、Ⅲ層では少なくとも2枚に分層される（もっともⅢ層は薄く、その中での上下関係は近接したユニット間のみに関していえることである)。礫群は破砕礫を数個集めたもので小規模。Ⅲ層に4個所（いずれも第4グループ）ある。この他、円礫4個を半円形に配石したものも1個所あった（所属グループ不明)。ユニットの配置、石器の接合・同一個体の関係、石器群の組成などから次の7グループに分類される。

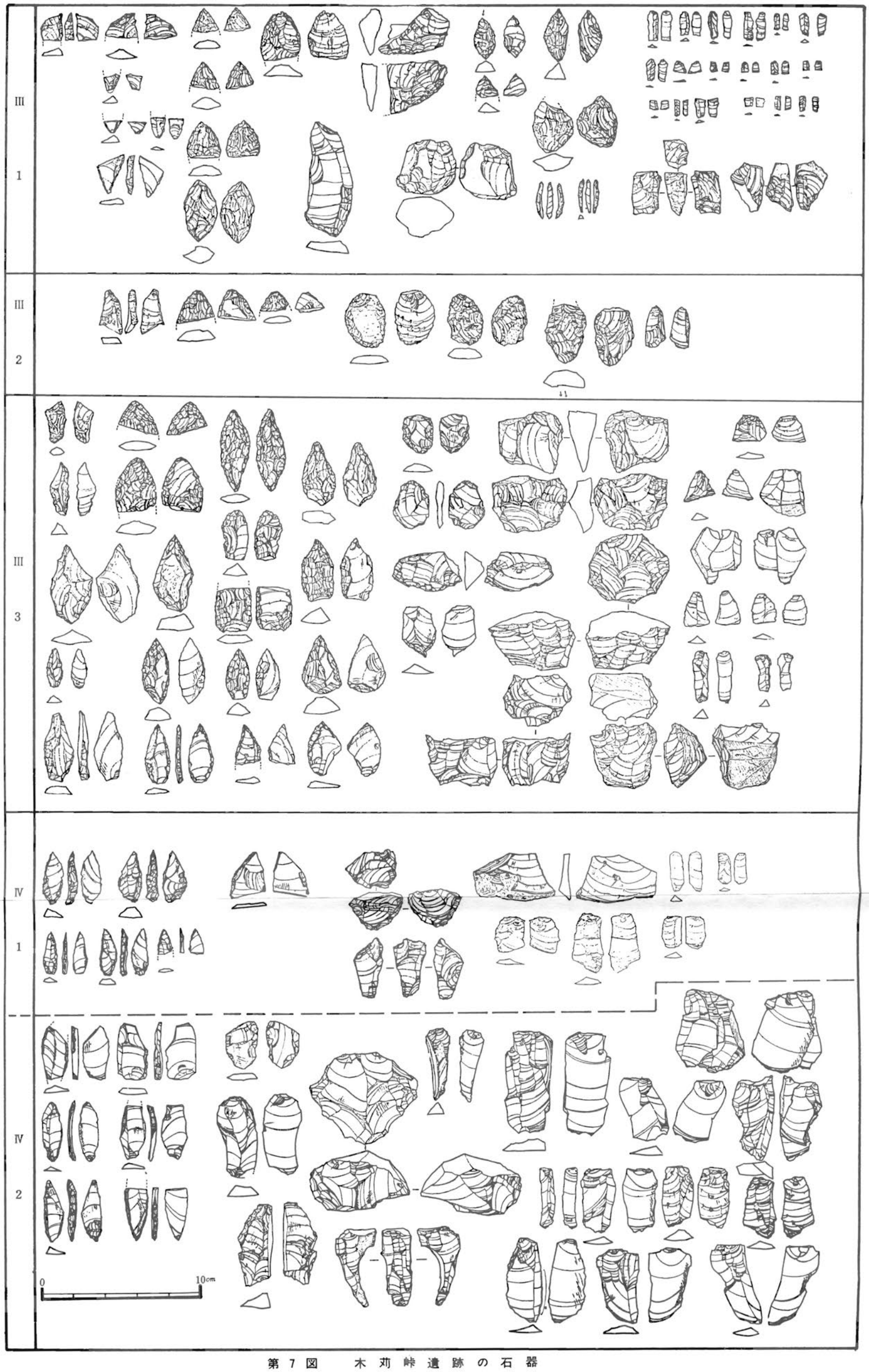
第1グループは3個のユニットよりなる。石器はナイフ形石器6、スクレイパー4、彫器1、ドリル1、石核3、刃器状剥片8、剥片類 535点である。ナイフ形石器は素材の両端を折断するように急斜なブランティングを施したものが主体であるが、比較的素材の変形の少ないものもみられる。彫器は刃器状剥片の打面側にファシットをもつもの。なお、石核1、ナイフ形石器未成品1、刃器状剥片1、剥片6、砕片3点の接合資料があり剥片剥離工程が類推できる。原材は10㎝強の角礫を用い、剥片を数点連続剥離すると、次は90度回転させて、前の剥離面を新たな打面として、 再び剥片を剥離する打面の転移が頻繁に行なわれている。 剥片はやや幅広の縦長剥片で、大きさの割に打面が小さい。このほか打面が平坦で大きく、同一打面を用いて連続的に剥離する手法もある。

第2グループもやはり3個のユニットよりなる。ナイフ形石器6、ポイント1、石核2、剥片類427点が出土。ナイフ形石器は折断手法によるものもあるが、小形化し、ペン先形の扁平なものとなる。ポイントはナイフ形石器に類似するが、刃部側にも裏面より調整された周辺調整のものがある。

第3グループは第2グループに隣接する。これも3個のユニットよりなる。石材は黒曜石(上多賀産）が主体であるが、安山岩、珪質粘板岩も若干含む。石器は第23ユニットで代表され、ナイフ形石器1、ポイント8、剥片・砕片192点。彫器あるいは典型的なスクレイパーはない。ナイフ形石器は全長24㎜と小形、素材は縦長剥片だが整ったブレイドではない。ポイントはナイフ形石器に比べ優勢となるが、周辺調整のものが顕著。剥片は不定形となる。

第4グループは他のグループのようにユニット間の有機的な関係は捕捉し得ない。おそらく未発見のユニットと組み合って数個のグループを形成するものであろう。石材はメノウ、チャートである。石器はナイフ形石器1、ポイント8、スクレイパー4、石核5、剥片・砕片216点であるが、ナイフ形石器は横長剥片を素材。基部側両側縁と先端の一部に粗いブランティングを施したもの。ポイントは両面調整もあるが、横長剥片を用いた片面あるいは半両面調整のものが主体。素材の関係上、先端が嘴状にまがる癖がある。なおポイントとして図示しておいたが、基部は平坦で鋭く、台形様石器の1種とも考えられるものもある。スクレイパー類が多いことも特徴的。

第5グループはユニット1個のみである。隣接する他のユニットがⅢ層上半部にあるのに対し、下部にあり、石材も安山岩、チャート、珪質粘板岩が多く、黒曜石は27%と他が8割強を



第７図　木苅峠遺跡の石器

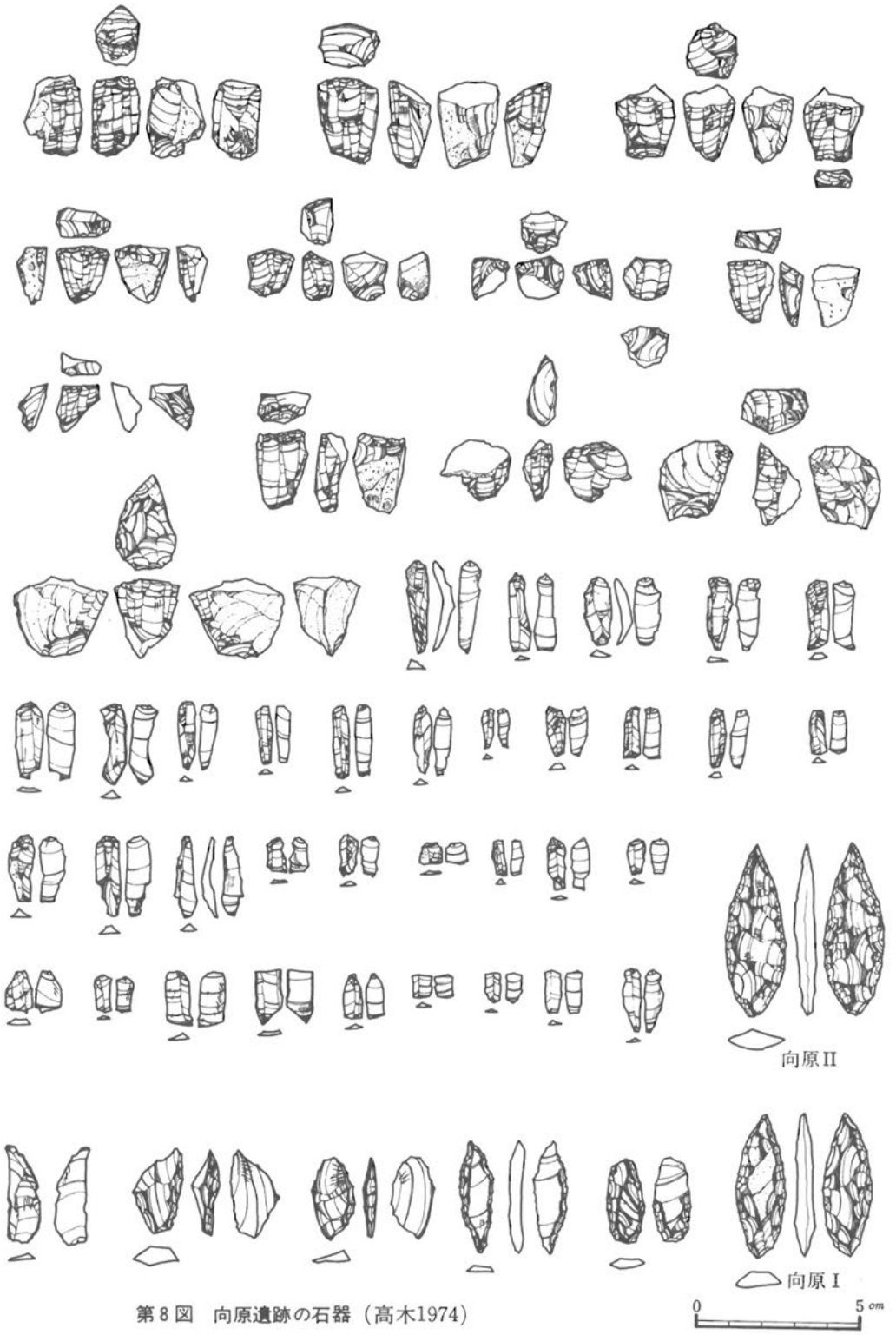
占めるのに比べると著しく比率が低い。ナイフ形石器２、切出形石器１、エンドスクレイパー１、石核１、剥片・砕片142点が出土。チャート製の石核にはエンドスクレイパー１、剥片12点が接合し、表皮の部分まで殆んど復原された。ナイフ形石器は縦長剥片を素材にしたものと、横長剥片のものが各１点あるが、前者も、もはや素材は刃器状剥片ではない。いずれもブランティングというより粗い剥離をもって背としている。横長剥片を素材としたものは幅広で、石器の長軸と刃部とのなす角度も大きい。切出形石器は両側縁とも急斜なブランティング、基部裏面にも打調がある。剥片剥離技術は打面転移が顕著だが、底面および側面の一部は自然面のまま残しており、石核における剥離痕の方向はある程度一定方向を示す。

第６グループの石器はナイフ形石器１、両面調整ポイント２、スクレイパー３、特殊な彫器状石器（男女倉型彫器）１、剥片・砕片443点である。ナイフ形石器は破片で全体の形状は窺えない。素材は不定形な剥片。彫器状石器としたものは既に新東京国際空港用地内No.51遺跡でもふれたが、ポイント状のブランクの先端にファシットをもつもの。スクレイパーはラウンドスクレイパーが顕著である。

第７グループはナイフ形石器４、切出形石器１、両面、半両面調整ポイント５、角型彫器１、男女倉型彫器５、細刃器35、細石核２、剥片等3,563点である。ナイフ形石器は先端と基部に粗いブランティングを施したのみの幅広なもの、素材の変形は少ない。切出形石器は素材を横長に利用し、打面側に分厚いブランティング、他の側縁にも微細な調整がある。刃部と長軸のなす角度は直角に近い。細石核は２点と少ないが、剥離面は打面に対し大きく傾斜。近隣の向原遺跡のように整った形状でなく、フルーティングも一面しかみられず技術的に稚拙なものである。なお、細石器関係のグループだけに砕片が著しく多い。黒曜石は箱根産に代る。

向原遺跡（第８図）　昭和46年10月から12月にかけて調査された。印旛沼より入る支谷最奥部谷頭に位置する。遺物の包含層はすべてⅢ層（ソフトローム）である。ユニットの数は報告書では５個と記載してあるが、細分すると礫群１個を含む９ないし10個のユニットとなる。

本遺跡のユニットは層序的にも、石器の組成・石材からも２分される。一つは５個のユニットより構成され、Ⅲ層上位の出土（向原Ⅱ）。細石器関係の遺物が多量にある。主要な石材は黒曜石、チャートである。他の一つは３or４個のユニットよりなる。Ⅲ層下位を中心に出土。切出形石器、ナイフ形石器、両面調整ポイントがある（向原Ⅰ）。主石材はチャートだが安山岩も多い。石器はナイフ形石器１、切出形石器５（未成品３含む）、ポイント４、細石核15、細石刃56点等と先土器時代終末期の優れた資料を出土している。細石核の形状は円錘形が４点、上面長方形の角錘形が６点ともっとも多く、円筒形１、不定形３、細石刃を剥離する以前の石核１点である。細石刃は頭部から尾部まで完存するものが意外に多く25点に及ぶ。切出形石器は細石器関係のユニットからはまったく出土していない。背部側に打点があるが、打面は調整を受け除去されている。ポイントは両面調整３、周辺調整１点がある。両面調整ポイ

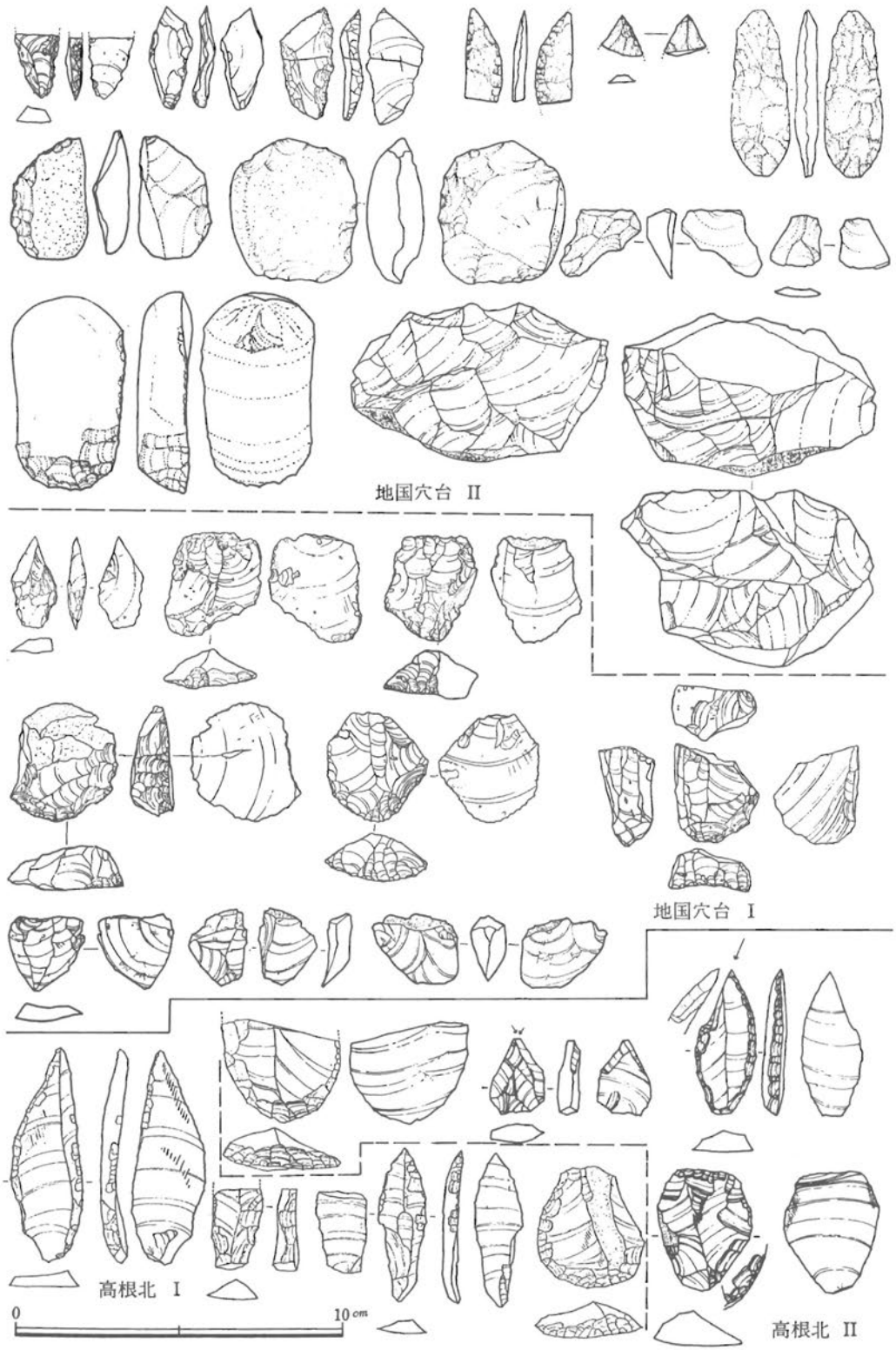


第8図　向原遺跡の石器（高木1974）

ント１点は細石器と共伴している。ナイフ形石器も切出形石器と伴出するユニットがある。縦長剥片の基部両側と先端の一部に簡単な刃潰しを施したもので、刃部はやや内彎している。剥片は不定形で小形、一部に調整を加えたものは多いが整ったスクレイパーはない。

地国穴台遺跡（第９図）　昭和46年12月から翌46年４月にかけて発掘調査された。向原遺跡とは同一支谷で、２つに分岐する支谷最奥部の谷頭に位置する。両遺跡間の距離はわずか500ｍにすぎない。検出されたユニットは11個で、Ⅳ層最上部で２個（地国穴台Ⅰ）、Ⅲ層で９個（地国穴台Ⅱ）である。このほか、縄文草創期の微隆起線土器を出土した地点が一か所あった。ユニットの配置はやや散漫で、南側の比高８ｍの緩い傾斜面に２個、南側の谷頭より入る比高約１ｍの西側の小支谷に面する緩斜面に９個が、２個ずつ１組になって占地。礫群は４個認められた。いずれもⅢ層であるが、このうち２個は、ほとんど礫片のみの存在で、石器はエンド、スクレイパー１と剥片６点にすぎない。残りの２個は礫片と石器が混在する。礫は凝灰岩、細粒砂岩、珪質粘板岩が多くいずれも火熱を受け砕片の状態で出土しており、円礫は少ない。特に配礫された、あるいは積み重ねられた状態ではなかったが、径2.6ｍの範囲に80数片の礫片が密集したものもあった。Ⅳ層最上部の石器はナイフ形石器１、エンド・スクレイパー６、石核３、調整痕のある剥片１、剥片・砕片199、ハンマーストーン１点である。ナイフ形石器は横長剥片を素材、背部に打面を残す。基部側の両側縁には刃潰しが行なわれているが、背の先端には及んでいない。石器の数量に比しエンド・スクレイパーの多いことも特徴的で、上下、左右同大の分厚い剥片の先端、あるいはほぼ半周に急角度のスクレイパーエッジをもつ典型的なもの。石核は小形、打面転移が頻繁であり、木苅峠第２グループのものに似る。石材は黒曜石が主体で珪質頁岩、粘板岩、凝灰岩、細粒砂岩を若干混える。Ⅲ層の石器はナイフ形石器５、両面調整ポイント２もしくは３、エンド・スクレイパー２、ラウンド・スクレイパー１、サイド・スクレイパー１、石核13、細石核３、調整痕ある剥片８、剥片・砕片201、ハンマーストーン（？）１点である。ナイフ形石器は素材を横長に用い、刃部と長軸とのなす角度の大きい切出形石器に類似するもの２点を含む。また継長剥片を用いるが切出形に近い形状のもの、基部両側縁の背の一部にブランティングを施し、刃部側がやや内彎するものもある。切出形石器類似のもののうち１点は刃部側側縁に打面を残す。スクレイパーはⅣ層に比べ少ない。形状にラウンド・スクレイパー、サイド・スクレイパーが加わっている。細石核は３点あるがマイクロブレイド、打面調整剥片とも皆無であり、細刃器を主体とするユニット群が未掘の部分に存在したとも考えられ、果して他の遺物と有機的な関連をもっているか疑問である。

高根北遺跡（第９図）　印旛沼より入る神崎川河谷一支谷の奥部、谷を南面する舌状台地に立地する。標高は約21ｍ。先土器時代のユニットは台地南側縁の中央部で２個がほぼ南北に17ｍの距離を隔てて並び（第１、第２地点）、さらに東に80ｍ離れた台地縁で１個（第３地点）の



第9図　地国穴台(上段)，高根北(下段) 遺跡の石器

計３個が検出された。遺物の包含層は第２、第３地点がⅣ層上部、第１地点はⅢ層下半部である。

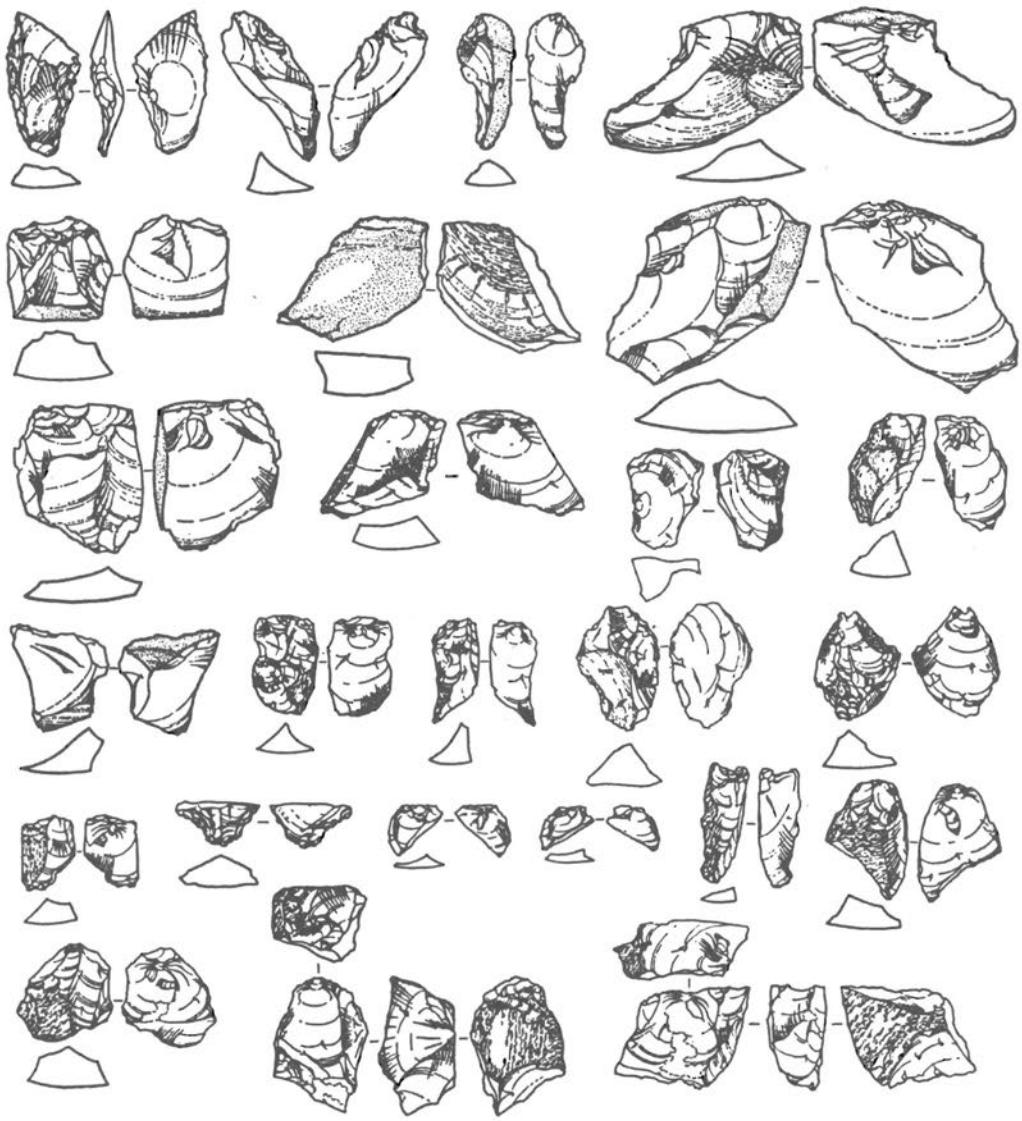
石器は第２、第３地点（高根北Ⅰ）と第１地点（同Ⅱ）に明らかに区別しうる。第２、第３地点は黒曜石を石材とし、第１地点は珪質粘板岩に玄武岩、メノウ、チャート、黒曜石を若干混える。

第１地点は特殊な彫器状石器１、通常の小形彫器１、エンド・スクレイパー２、ドリル１、スポール２、剥片・砕片34点が発見された。　またユニット中心よりやや北に偏して破砕礫を集めた礫群があり、その西で石器群より下位に焼土、木炭が検出された。彫器は表面あたかも周辺調整ポイントのごとき形状を呈し、左肩にファシットが２条認められる。芹沢長介氏が分類した荒屋型彫器の第１の形態に似る（芹沢1959）が、通常の荒屋型彫器よりも、より先端が鋭い。第２地点の石器はナイフ形石器(？)１、周辺調整ポイント２、エンド・スクレイパー１、刃器状剥片２、残核１、剥片・砕片39点である。ナイフ形石器は先端部を欠損しているが、基部に打面を残し、両側縁には急斜なブランティング。素材の変形は少ないようである。ポイントは特徴的で、技術的にも形状的にもナイフ形石器に近いもの。背部全周と、基部にナイフ形石器そのもののブランティングがみられるが刃部となる部分に裏面からも調整しているものもある。エンド・スクレイパーは周縁の半分以上に刃づけをしたものでⅢ層のものと大差ない。やや幅広の剥片を素材。第３地点は剥片のみ15点の出土である。

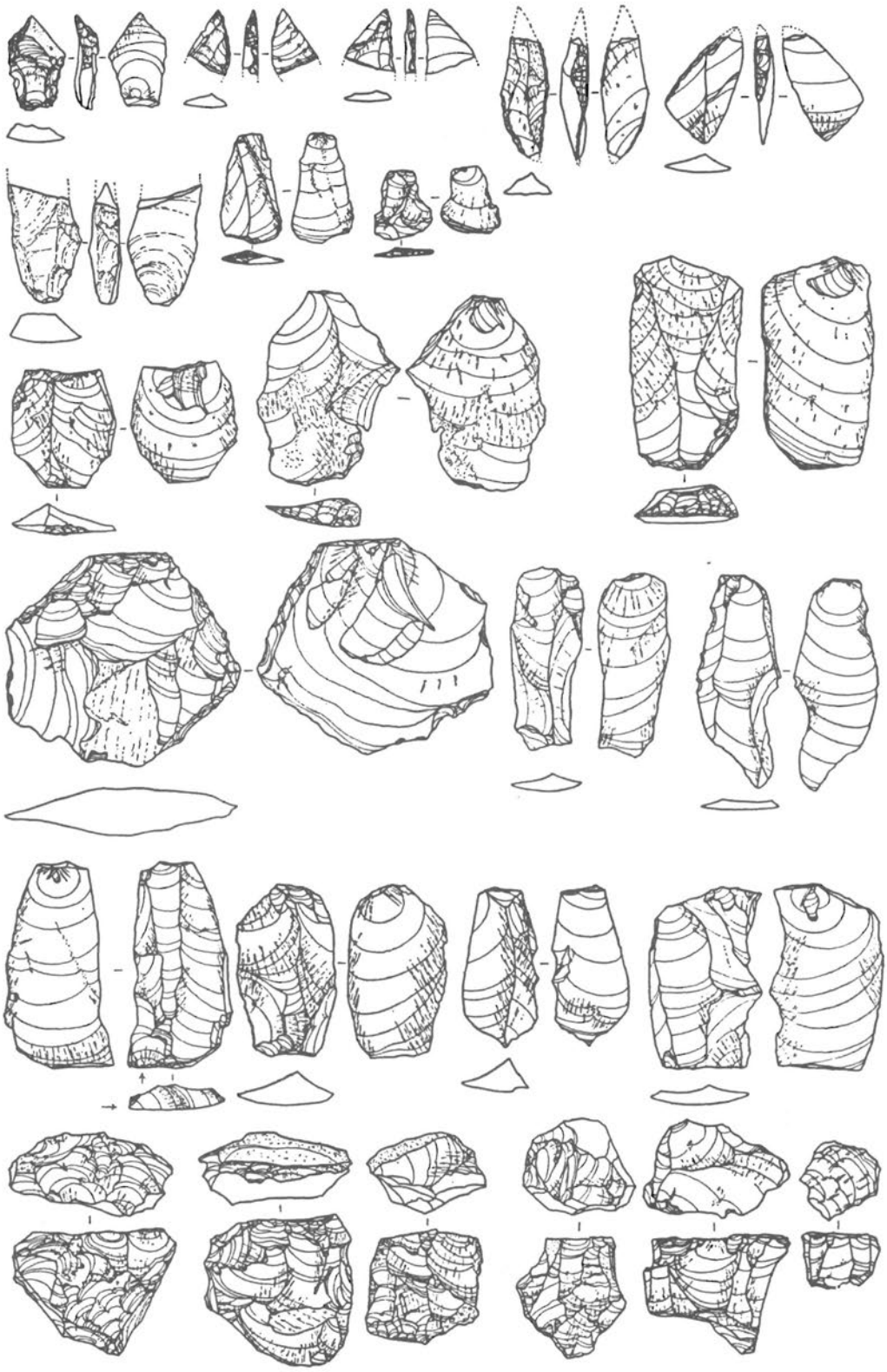
丸山遺跡（第10図）　先土器時代としては本県で初めて発掘調査された遺跡である。江戸川に面した狭長な台地先端部に位置する。標高は約25ｍ。Ⅲ層下部よりユニット１個、小礫群がユニット内及びユニットの北方に隣接して存在した。遺物はローム上面から45～85cmの深さで発見されたという。遺物の層位への投影図をみると60～70cmに最も多い。またⅢ層（ソフトローム）の厚さは約75cmとのことである。下総台地の一般的な厚さ（30～50cm）に比較するとロームのソフト化が著しく進んでいるようで、本来はⅣ層、それも下半部の石器群とみた方が妥当と思われる。　石器は切出形石器１、石核２、剥片23、砕片14点。切出形石器は刃部側側縁に打面を残置。剥片は、縦長のものも含むが、横長のものが多く、打面は未調整である。石材は黒曜石が最も多く（30点）、他に頁岩（９点）、メノウ（１点）がある。筆者はかって、層準から木苅峠Ⅲ3期前後と考えたことがあるが、やや遡りそうな石器群である。フイショントラックが望まれる。

今島田遺跡（第12図）　遺跡標高は約20ｍ、鴻ノ巣遺跡と同様下総下位面にある。大柏谷東方の支谷の分岐点に立地し、法蓮寺山遺跡とは谷一つ挟んで約750ｍの距離を隔てるにすぎない。発見されたユニットは２個で、Ⅲ層上面に付着したような状態で検出された。石器はナイフ形石器６、スクレイパー６、石核11、剥片91、砕片65点。この他メノウの川原石が４点あり、剥

片には彫器と思われるものも２、３点あるという。石材はメノウが圧倒的で167点を占め、他に黒曜石（９点）、安山岩（１点）、砂岩（１点）、頁岩（１点）がある。ナイフ形石器はすべて縦長剥片を素材としたもの。素材を斜めに折断したようなブランテングを施したのみのものもあるが一般に変形は少ないようである。刃器状剥片を用いたエンドスクレイパーが多いことも注意される、剥片剥離は木苅峠Ⅳ2期に類似し、前の剥離面を次の打面とする打面の90°転移が行われている。剥片は中、小型の刃器状剥片が多い。エンドスクレイパーの特徴等から小田静夫氏は東北地方の東山型ナイフ形石器文化に共通を見い出せると指摘している（小田1976）。印



第10図　丸山遺跡の石器（杉原他1955）　0　10cm



第11図　今島田遺跡の石器（杉原1971）

旛郡本埜村大門遺跡では、塚周溝で先端を２分の１程Ⅲ層に突きささったような状態で南関東では見られないような長大な刃器が出土しており、出土層準の問題をも含めて今後検討を要する。

船尾白幡遺跡（第12図）　Ⅲ層上部より細石器のユニット１個が発見された。彫器１、スクレイパー１、ドリル１、細石核７、細石刃20点以上、剥片等150点を出土。石材は殆んど黒曜石である。細石核は円錐、半円錐形のものであるが比較的粗雑で細縞状の細石刃剥離痕は２～４条である。彫器はやや分厚な剥片を素材としている。

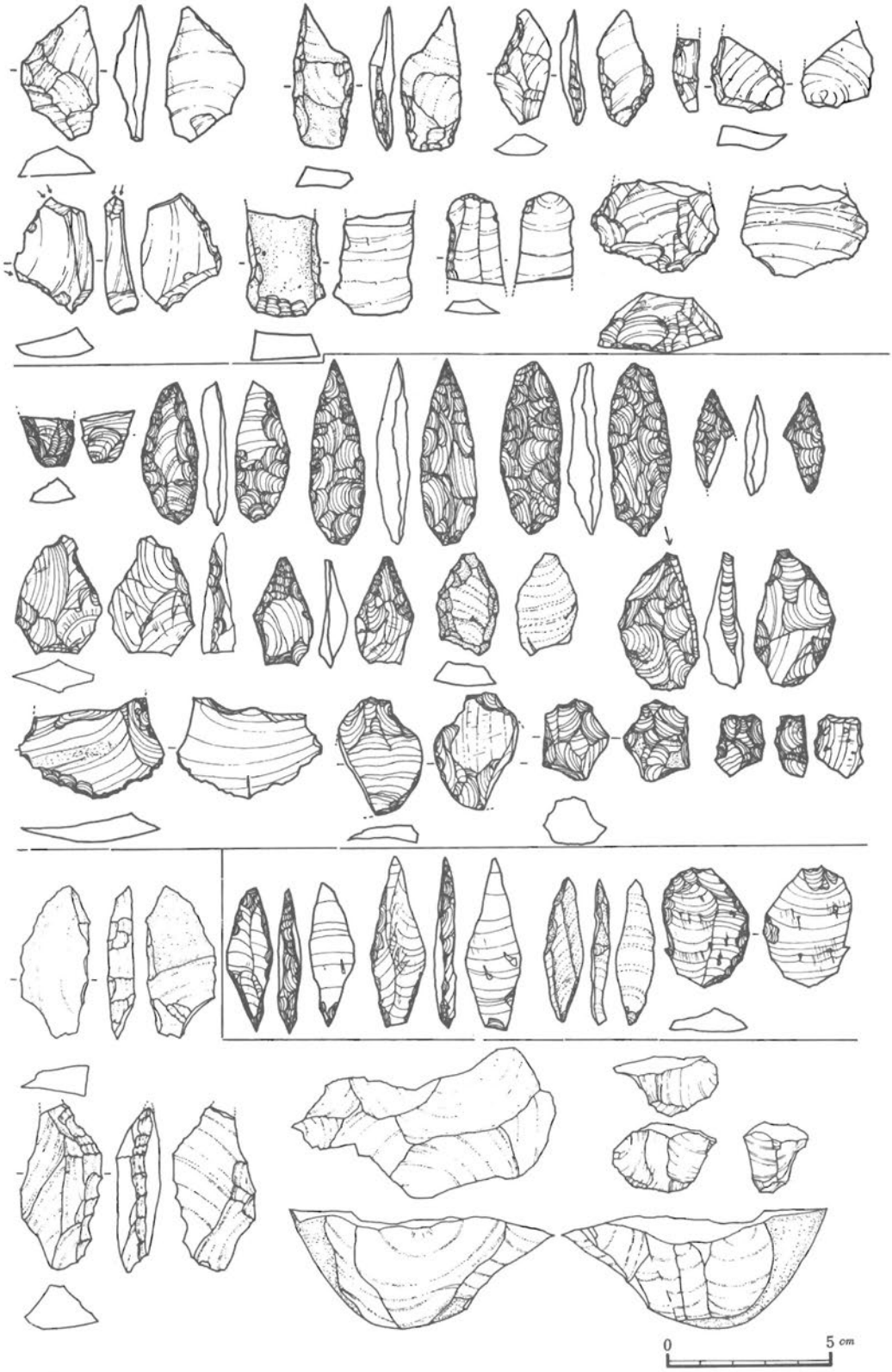
第12図　船尾白幡遺跡の石器（古内1976）

武西北の台遺跡（第13図）　Ⅲ層より２個のユニットを検出。ナイフ形石器５、彫器２、エンドスクレイパー３、刃器状剥片２、剥片・砕片34点が出土。石材は黒曜石を多用しているが、珪質頁岩、メノウ、粘板岩、頁岩、細粒砂岩もある。ナイフ形石器の一群は特徴的で、素材は特に意識された目的的剥片ではなく、任意の剥片を利用。プランティングは概して粗く、表裏に施されるものがある。バルブは除去されないものが多い。

石頭谷津遺跡（第14図）　６個のユニットが検出された。いずれもⅢ層である。ナイフ形石器９、切出形石器２、両面調整ポイント１、彫器２、ドリル１、石核３点等が出土。ナイフ形石器は横長剥片を素材としたものが３点ある。縦長剥片を素材とするものは１点を除き素材の変形は少ない。プランティングは基部及び背の一部にのみ施された例が多く、打面を残置するものもある。

その他の遺跡　これまで述べてきた遺跡の他にも重要な遺跡は多い。特に成田市から印旛郡富里村、八街町にかけては大規模な遺跡が多く、地元の篠原正氏等の熱心な踏査により10個所を越える遺跡が発見されている。特に富里村南大溜袋、七栄東内野、印旛郡八街町住野は良好な遺跡である。**南大溜袋遺跡**（戸田1973）は先土器時代最終末の遺跡として代表的な遺跡である。昭和47年11月に佐藤達雄氏らによって発掘調査され、わずか64㎡の小規模な調査であったが、ソフトローム層に入って10～30㎝のところでポイントを中心とする大量の石器が検出された。遺物は８×４ｍの範囲に集中し、ポイント72点のほか、サイド・スクレイパー、ノッチド・スクレイパー、石鏃、矢柄研磨器の一種等であるが、ソフトローム下部から石核１、細石刃２点の出土もあった。戸田哲也氏は縄文時代草創期前半の遺跡としているが、土器片の出土はなく、石器に有舌尖頭器も含まれていない。**東内野遺跡**は昭和51年１月に戸田哲也氏等によって調査された。やはり小範囲でローム最上部のみの調査であったが、ナイフ形石器を多数出土しているようである。県下では遺跡の規模はともかく、Toolの出土点数が一般に少なく、石器群組成の貧弱な遺跡が多いのであるが、両遺跡は極めて多数を出土しており正報告が待遠しい遺跡である。

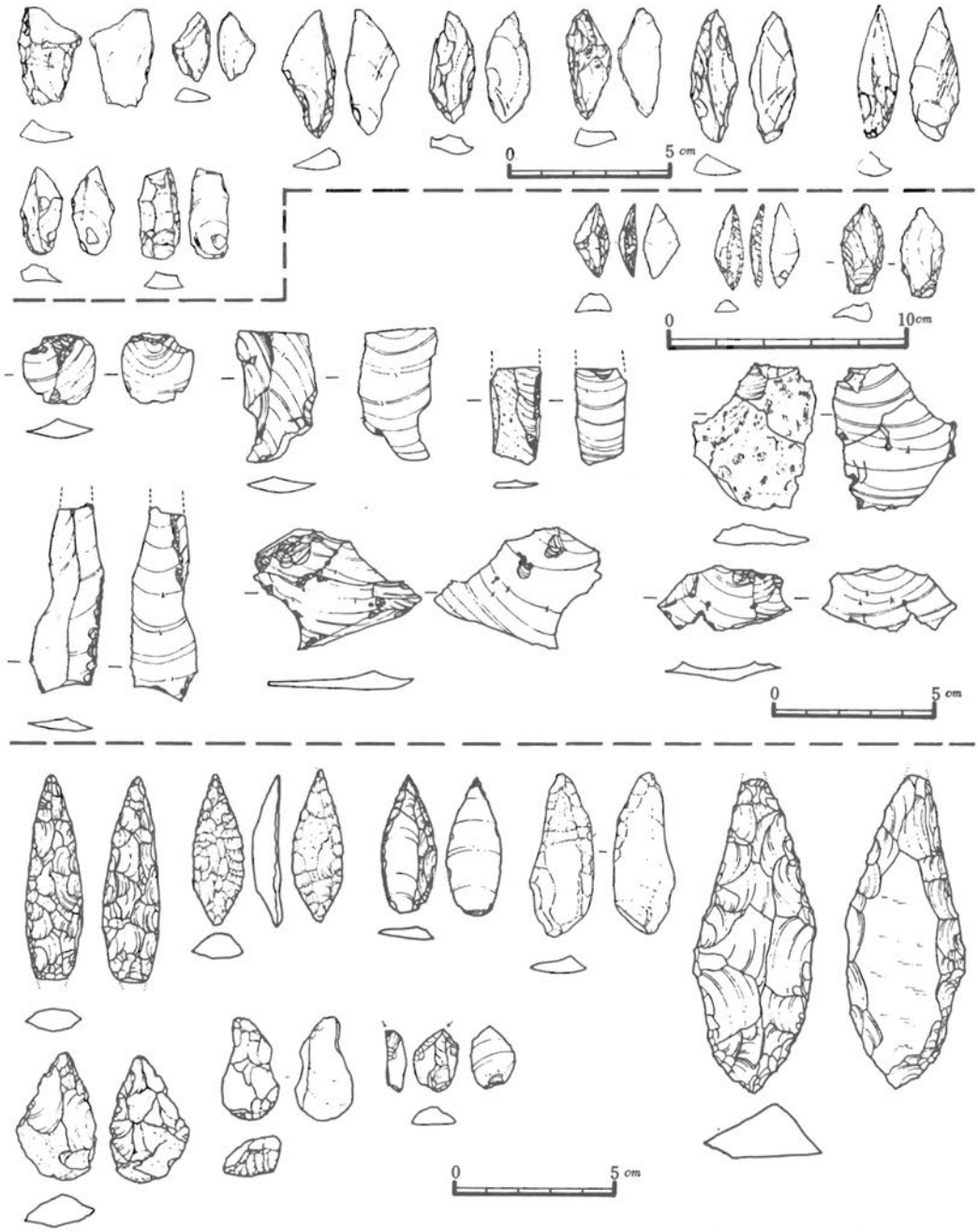
手賀沼流域には**鴻ノ巣遺**跡がある。地形的には下総下位面にあり、標高は17ｍと低位に位置する。Ｂ１区ではソフトローム層とハードローム層と境界部で礫群のユニットが４個密集し、さらに東方約７ｍ隔てて礫群が１個ある。石器はほとんど伴わず、２個のユニットで剥片が付随する程度に存在。また同一台地の手賀沼寄りへ約120ｍ離れたB4区でもユニットが２個発見されている。石器総数169点、内訳は両面調整ポイント２、ナイフ形石器１、彫器２、不定形石器２、石核４、スポール１点等である。ナイフ形石器は小形刃器状剥片の素材をほとんど変形せず、刃部となる先端の一部を除き全周に薄い刃潰しを施したもの。石核は小形で細石核に近いものもある。剥離方向は一定していない。石材はＢ１区で黒曜石、玄武岩、チャート、Ｂ４区



第13図　北の台(上段)，一ノ作(中上段)，雨古瀬(中下段)，六角(下段)遺跡の石器

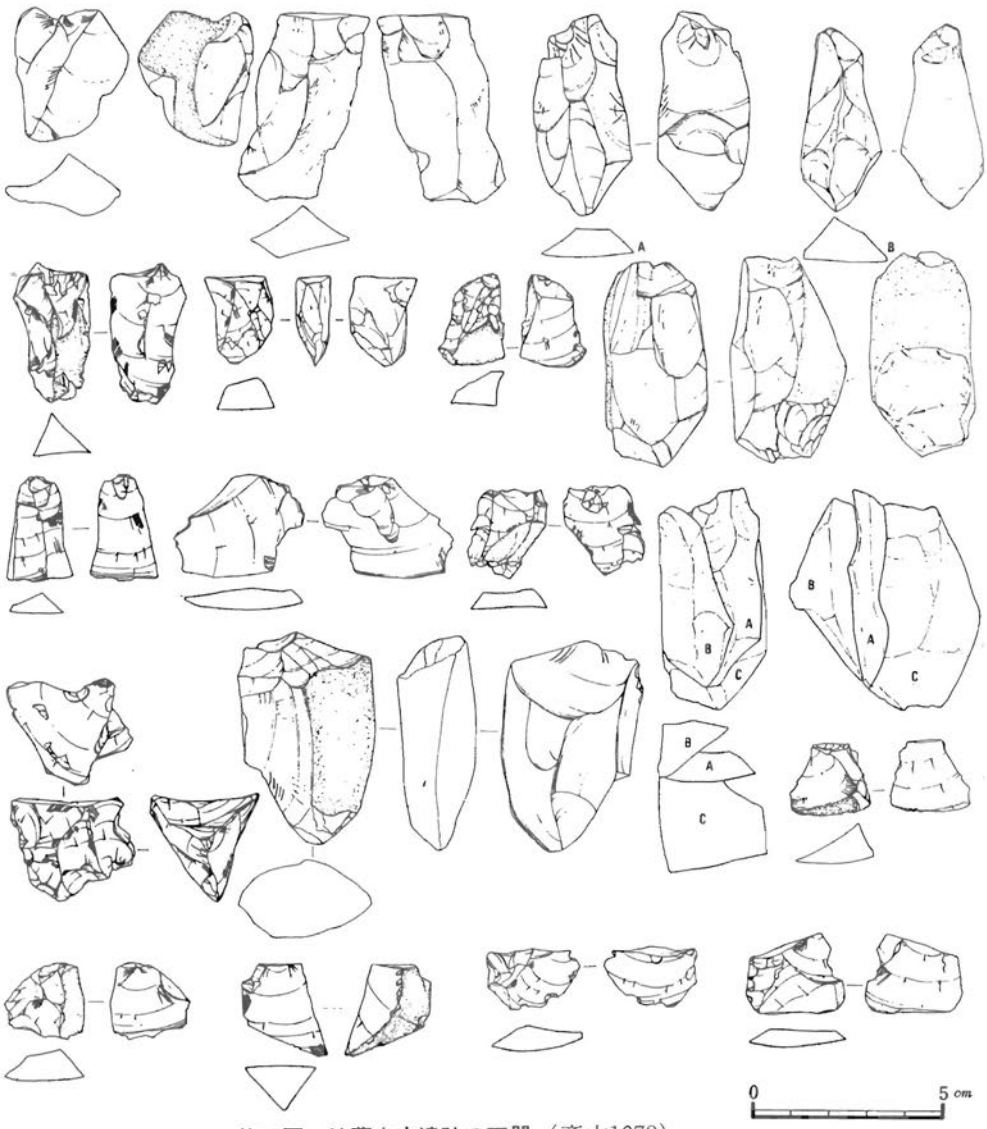
は凝灰岩、チャートである。船橋市には**法蓮寺山遺跡**（第15図）がある。Ⅳ層中位より出土、総数69点、石核９（うち３は断片）、剥片32、砕片28点を出土。石材は黒曜石が52点と最も多く、硬砂岩（14点）、頁岩（３点）もある。剥片は縦長剥片が多い。

印旛、手賀沼間の千葉ニュータウン内の遺跡は既述した以外にも雨古瀬、一ノ作、別所大山、



第14図　石道谷津(上段)，県立コロニー内(中段)，村上込の内(下段) 遺跡の石器

草深六角、向原北等の諸遺跡がある。**雨古瀬遺跡**（第13図）はユニットが２個以上あり、ナイフ形石器３点等が出土。出土層はソフトロームであるが、原位置を動いているようである。**六角遺跡**（第13図）はⅣ層上層より横剝ぎのナイフ形石器、石核、剝片等が、**向原北遺跡**では切出形石器１、スクレイパー２、礫器１を含む200点余の石器類がⅢ層より出土した。**別所大山遺跡**はメノウの小形石核１、スクレイパー１、彫器（？）１、剝片29、砕片15点がⅢ層下部より出土。周辺を拡張したが１ユニットのみの検出であった。**一ノ作遺跡**（第13図）はローム内の調査は実施されていない。縄文前期関山期の集落調査時に出土したもので、ポイントがやや多い。印旛沼東南の八千代市**村上遺跡**（第14図）でも先土器時代の遺物が国分期の集落址の調



第15図　法蓮寺山遺跡の石器（斎木1972）

査中に検出された。ポイント、彫器等があるが、ローム内の調査は実施されていない。

千葉市でも漸く、先土器時代の遺跡が発掘調査された。**県立コロニー内遺跡**（第14図）である。Ⅲ層より剥片８、礫片３点のみの１ユニットである。この他、地点を隔てるが小形で分厚い面的加工を施した終末期のナイフ形石器の検出もある。

房総丘陵では最近、立教大学考古学研究室によって夷隅川上流域の先土器時代遺跡が数個所発見され（立教大学考古学研究室1974）、長者ヶ台高梨、荒川遺跡群吉田の２遺跡が調査された（加藤ほか1974）。**長者ヶ台高梨遺跡**はローム層内の調査は行なわれなかったが、吉野忠衛氏の表採品にはナイフ形石器、木苅型彫器状石器がある。**荒川遺跡群**は夷隅川流域でももっとも期待される大形の遺跡とのことで、ポイントが多数発見されている。

4　下総台地における先土器石器群の位置づけと若干の問題点

近年、相模野、武蔵野台地では多数の重複する文化層をもつ遺跡が相当数発掘調査され、かっての小規模な調査に依る資料をもとにした直線的な羅列とは全く異なった結果を生じてきている。特に東京都野川（小林・小田他1971）、西之台、鈴木遺跡（小平町鈴木遺跡調査会1975）では文化層の重複が実に10枚以上に及び、広大な面的把握とともに多大な成果をあげている。一方、下総台地では星谷津遺跡で６枚、木苅峠遺跡で３枚、地国穴台、向原、高根北遺跡で２枚の文化層の重複がみられたのみで、ローム層の薄さ、鍵層の欠如が大きな障害となり、編年的な位置づけは困難である。むしろ、ローム層の薄さを逆に利しての広域な遺跡構造、遺跡間における関係を追求した方が今後、より優位な研究方向と言えるかも知れない。さて、既に筆者は昨年、下総台地における編年私案を示したことがある。僅か１年後の今日で、その後追加された主な資料は岩富星谷津遺跡のみで、特に大きな修正を要しないが、一応再整理しておこう。

小田静夫、C.T.Keallyは武蔵野台地の豊富な資料をもとに４つのPhase（Phase Ⅰ～Ⅳ）と２つのSub－Phaseに分類している（小田・Keally1973）。従来の限られた資料から型式論的に配列していた編年観を克服したもので、現時点では最も有効な編年区分であろうと思われる。（但し、これまで資料的に貧弱で石器組成内容が明らかでなかったPhase Ⅰも今後、資料の集積とともにいくつかのSub－Phaseに分類する必要があろう。）

Phase Ⅰ　下総台地で最も古く位置づけられるのは新東京国際空港用地内（以下三里塚と略称）No.55遺跡と星谷津第Ⅶ・Ⅷ層である。層序的に不安があるが臼井南遺跡も三里塚No.55に近い。No.55遺跡では局部磨製楕円形石器、ナイフ形石器、彫器、刃器状剥片がある。局部磨製楕円形石器は扁平な川原石の一面を調整し、刃部を両面から研磨したもの。東京都栗原Ⅹ層等とともに小田静夫氏によってType Ⅰとされたもの（小田1973）、類例は東京都鈴木遺跡第Ⅸ層にみられる。富山県直坂（橋本1973）、同立野ケ原（橋本他1974）、長野県杉久保遺跡（信濃町教委1966）等のナイフ形石器が卓越した時期におけるような両端がややフラットになる楕円形石器（TypeⅡ）とは形状的に相違する。ナイフ形石器は当初、果してナイフ形石器としてよいか疑問視されたのであるが、その後、西之台遺跡においてⅤ～Ⅶ層（ＢＢⅠ～ＢＢⅡ上）からの発見があり、鈴木遺跡では第Ⅹ層の出土例が報ぜられた。三里塚No.55遺跡のナイフ形石器は縦長剥片の素材を生かし、打面を残した基部両側縁と背の上端部にプランティングを施したもので、剥片の形状は異なるものの（いずれも縦長剥片を用いているが三里塚No.55遺跡が末広がりの剥片であるのに対し鈴木遺跡は先細りである。）、鈴木遺跡例とは酷似している。なおNo.55遺跡は幸い多量の木炭がユニットに接して検出され29,300±980年、28,700±920年という数値が与えられている。星谷津遺跡は資料的に乏しいが、明らかに武蔵野ローム直上（Ⅷ層）より、やや、幅広の剥片が、第２黒色帯より大形の刃器状剥片１、砕片２点の出土をみた。Ⅷ層の剥片は特

徴的で、扇形に広がった折断剥片は切出形石器の素材となる剥片を彷彿させる。恐らく偶然の類似ではあろうが、ナイフ形石器の上限が、ここ数年間で著しく遡った事実を考慮すると、所謂、切出形石器も上限が今後、大きく移動する懸念も残る。臼井南遺跡からも楕円形石器の出土が報ぜられている。破片で全体の形状は不明、磨製はされていない。本期における剥片剥離は、三里塚№55遺跡の一部、臼井南遺跡におけるように打面一定せず、剥片剥離面を次の打面とし、打面が上下、左右に転移している。

PhaseⅡA、この段階に相当する石器群は本県では明らかでない。現在、PhaseⅡA期に近いと思われるものは、星谷津遺跡G4地区の一部、G8地区の計5ケのユニットからの石器群であろう。層準的にはG5地区がⅣ層下部、G8地区はソフトローム下部であるが、両地区とも傾斜地で、G8地区はⅣ層の下部がソフト化した可能性が強く、G5地区は或はⅤ層に相当するかも知れない。正確には土壌分析、黒曜石のフイショントラックの結果を待ちたいが、G8地区からは角錐状石器(通称ゴロゴロ)が2点出土している。角錐状石器は武蔵野台地のPhaseⅡA、相模野台地の第Ⅲ期に特徴的な石器で本地区が遡る時期のものと言えるかもしれない。この他、ナイフ形石器、切出形石器、エンドスクレイパーがある。ナイフ形石器は比較的分厚い縦長剥片を用いた小形のもの。素材の変形は少なく、背部側のブランティングは粗い。打面はいずれも基部にあたるが、残置したものも存在する。未だ調査中(51年3月15日現在)の遺跡で未整理であるが接合関係も大分あるようで、今後剥片剥離技術等を詳しく検討したい。丸山遺跡は報告書の層準から、より新しく考えていたが、遺物の深さ(ローム上面より60～70cm)を考慮すると本段階に入りそうである。両遺跡とも横長の剥片が多く、武蔵野台地の場合と類似している。

PhaseⅡB　この期になると下総台地でも遺跡数はかなり多い。代表的な遺跡は木苅峠、高根北、向原、北の台、星谷津である。層位的にはⅣ層およびⅢ層の一部で武蔵野台地と大差ない。ナイフ形石器は折断手法のものが主体を占めるが終末期にはむしろ素材の一部にブランティング、或は粗い打調をもってブランティングに代える例もある。折断手法を用いた例は極めて小形で細石器的なものも少なくない。後述する木苅峠Ⅳ1期などは武蔵野台地よりもむしろ相模野台地のナイフ形石器に類似するものがある。ポイントの普及は以外に遅い。木苅峠Ⅳ2期には皆無でⅣ1期でも乏しい。現時点での本県の出土例では、初期のものは周辺調整(ナイフ的な調整)、片面調整が大多数を占める。切出形石器は最も普遍的な石器の一つであるが、大半が打面を残置している。以下、本段階では最も整っている木苅峠遺跡を中心に述べよう。

木苅峠Ⅳ2期　第1グループのユニット群より形成される。ナイフ形石器は折断手法によるもの。剥片剥離はいわゆる石刃技法に近いものもあるが、両設打面をもつ石核も存在する。ナイフ形石器にも砂川型刃器技法(砂川遺跡調査団1974)によると推定されるものもある。また剥片を数枚剥離すると、次はその剥離面を新たな打面とし、石核を90°回転して剥片剥離を行う手法もある。剥片はやや幅広となる傾向。Ⅲ層の出土ではあるが、雨古瀬遺跡では縦長剥片を素

材とし、上下を斜めに折断したナイフ形石器があり、木苅峠Ⅳ2期に近い。ナイフ形石器は出土層準がⅡ層であるが、プライマリーな包含層ではないであろう。今島田遺跡の剥片剥離技術は本期の一部に酷似するものがあり、刃器状剥片の出土も多く、本期前後に比定できるかも知れない。

同Ⅳ1期　Ⅳ2期と層位的には区別できないが、第２グループのユニット群にみられる段階。ナイフ形石器に裏面基部調整が存在するのはⅣ1期と共通する。器種に周辺調整のポイントが加わっている。ナイフ形石器は素材の変形が大きく、小形化の傾向。形状的には細石器的になり、相模野台地ＢＢ１層出土の月見野第Ⅱ遺跡に類似する。両面調整のポイント、切出形石器、台形様石器は欠落している。剥片は縦長を主体とするがⅣ2期に大量にみられた大形のものは皆無となる。本期より若干下る位置に高根北Ⅳ上層、地国穴台Ⅳ上層がきそうである。スクレイパーが多いことも特徴的である。切出形石器の欠落は資料的にまだ貧弱なためであろう。

同Ⅲ3期　Ⅲ下層の文化層である。隣接するⅢ2、Ⅲ1期のユニットとは明らかな上下関係があり、同一台地の平坦部ではⅢ層（ソフトローム）中でもある程度の層準関係は有している。ポイントの飛躍的な増大がある。ナイフ形石器は多様で、素材の変形は前段階に比べむしろ少ないようである。切出形、台形様石器が漸く下総台地でも一般的になってくる。ナイフ形石器は素材を生かし、基部と側縁の一部に粗いブランティングを施したものも存在する。石材はチャート、メノウ等が多くなり、黒曜石の産地は和田峠から箱根に移っていく。剥片は不定形のものが多いが、縦長の刃器状剥片も僅かながら存在する。ポイントは周辺調整のものも残存するが両面、片面調整が一般的になる。層準的に不安定なⅢ層であるが地国穴台Ⅲ下層、向原Ⅲ下層、石道谷津Ⅲ層、武西北の台Ⅲ下層は本期に近いであろう。地国穴台、向原、石道谷津では典型的な切出形石器が存在し、本期の石器組成における中核の１つであることを示している。また武西北の台遺跡のナイフ形石器は終末期の特徴をよく示したもので、ブランティングは粗く、基部が裏面調整となるもの、大きな平坦剥離をもってブランティングに代用したものもある。分厚い不定形の剥片を用いたエンド、スクレイパーが多いことはⅣ1期をそのまま引継いでいる。

同Ⅲ2期　Ⅲ3期とは明瞭な上下関係があり、石材も黒曜石を多用している。現在、本段階の確認されている遺跡は木苅峠遺跡のみであり、石器点数が少なくその組成内容は明らかでないが、折断手法によるナイフ形石器（破片で形態不明）、両面・半両面調整ポイント、エンド・スクレイパーのほか、ポイント状のブランク（多くは片面調整）の肩にファシットをもつ特殊な彫器状石器、所謂，男女倉型彫器がある。男女倉型彫器はかって筆者が木苅型彫器と仮称したもので、長野県男女倉遺跡で多数検出された。まず、両面もしくは片面加工のブランクを作り、先端より斜めに撃打を加えて彫器としたものであるが、木苅峠遺跡の例は器面に平行にいれたもので、むしろ男女倉型ナイフに近い。加藤晋平氏により北海道の彫器との近似性が指摘されたことがある（加藤1975）。男女倉技法は関東北に広く分布しており、両面もしくは片面加工のポイント状のブランクをナイフ形石器、彫器、スクレイパーの共通素材としており、石

刃技法消滅後の新しい素材の基盤として注意される。

PhaseⅢ　細石器が使用された段階である。かっては休場、矢出川遺跡における如く石器組成が単純と考えられていたが、木苅峠遺跡ではポイント、ナイフ、スクレイパーが、No.52、向原遺跡ではポイントが、星谷津遺跡ではナイフ形石器、ポイントが、また星谷津遺跡を除いて木苅峠Ⅲ1期にみられたような男女倉型彫器あるいはナイフ形石器が伴なう。減少するものの依然として存在するナイフ形石器は星谷津遺跡に完存例がある。小形の縦長剥片を用い、背部先端は斜めに折断したようなブランティング、基部両側縁は簡単な細部加工のみを施したもの。最近、茨城県勝田市後野遺跡（後野遺跡調査団1975）では船底型石核、荒屋型彫器が出土したことが報ぜられているが千葉県下では船底型石核の出土例はない。荒屋型彫器に類似するものは高根北遺跡にある。船底型石核が県下で発見されるのも時間の問題であろう。

PhaseⅣ　先土器時代の終末期である。細石器は九州を除き消滅する。ポイントが異常な発達をみせ、大形の一群が登場する。最終末期には基部を舌状に作出した有舌尖頭器が出現する。県下でのこの時期の遺跡は少なく、発掘調査されたものは僅かに南大溜袋遺跡が知られているのみである。略報のみでその詳しい内容は不明であるが、大小の多数のポイント、スクレイパー、矢柄研磨器の一種、石鏃、植刃があるとのことである。石鏃が明らかに組成の一つであるとすれば報告者の戸田氏の言うように縄文時代草創期に入るわけであるが、ポイントの数量(72点)の莫大さに比し、石鏃は１点であり、石器組成上疑問点が残る。石鏃が土器を伴わずにソフト

第２表　房総における先土器石器群の変遷

Phase	遺　　跡　　名
(縄文草創期)	瀬戸遠蓮 地国穴台
Ⅳ	南大溜袋，元山，三里塚No.22，殿台(？)
Ⅲ	向原Ⅲ上層（10,700±500），星谷津Ⅲ上層 木苅峠Ⅲ１（11,400±1,030 ＯＢ－ＦＴ），三里塚No.52
ⅡＢ	木苅峠Ⅲ2（12,800±1,150 ＯＢ－ＦＴ） 高根北Ⅲ下層（12,000±200 ＯＢ－ＦＴ） 木苅峠Ⅲ3（12,000±400 ＯＢ－ＦＴ），地国穴台Ⅲ下層，鴻ノ巣（11,500±900 ＯＢ－ＦＴ） 石頭（12,400±700 ＯＢ－ＦＴ） 木苅峠Ⅳ1（14,600±200 ？ ＯＢ－ＦＴ），高根北Ⅳ上層（12,200±350 ＯＢ－ＦＴ） 六角Ⅳ上層，星谷津Ⅳ上層， 木苅峠Ⅳ2（12,900±200 ＯＢ－ＦＴ），雨古瀬（16,800 ＯＢ－ＦＴ）？，今島田？ 法蓮寺山
ⅡＡ	星谷津Ⅳ下層，丸山？
Ⅰ	臼井南，星谷津Ⅶ層 三里塚No.55Ⅷ層（29,300±980 C14），星谷津Ⅷ層

ローム層中における先土器石器群の中に混入する例は少なくない。また典型的な有舌尖頭器が存在しないことは縄文草創期説に疑問を感じさせる。矢柄研磨器とされたものも真正なものではない。地国穴台、瀬戸遠蓮遺跡或は埼玉県橋立岩陰（芹沢1967）、栃木県大谷寺洞穴（天開山大谷寺1972）などの関東地方の石器群とは大きく異なり、そしてなによりも土器が全く出土していないことは致命的である。群馬県石山（相沢1967）、新潟県中林（芹沢1959）、本の木（芹沢・中山1967）、西之台Ⅲ上層の石器群に類似するものであろう。この他、表採例であるが初富飛地元山、子和清水遺跡が、本段階に当ろう。殿台遺跡も近似したもののようである。

文　献（県内関係は序文末尾に記載、また第２編と共通するものは省略した）

後野遺跡調査団（1975）「茨城県勝田市後野遺跡の調査」考古学ジャーナル No.116

加藤晋平（1975）「北海道の石刃石器群について」日本考古学協会昭和50年度大会研究発表要旨

小田静夫・C.T.キーリー（1973）『武蔵野谷園遺跡Ⅰ』

小田静夫・C.T.キーリー（1974）「立川ローム層最古の文化」貝塚13

Keally, Charles, T(1972) The Earliest Culturs in Japan　Monumenta Nipponica XXⅦ

信濃町教育委員会（1966）「杉久保A遺跡緊急発掘調査報告」

Suzuki, Masao (1974) Chronology of Prehistoric Human Activity in Kanto, Japan, PartⅡ, Time-space Analysis of Obsidian Transportion　Journal of the Faculty of Science, The University of Tokyo, Sec, V, Vol, Ⅳ

芹沢長介（1959）「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫刻刀について（予報）」第四紀研究　第１巻５号

芹沢長介・吉田格・岡田淳子・金子浩昌（1967）「埼玉県橋立岩陰遺跡」石器時代８

天開山大谷寺（1972）『大谷寺洞穴遺跡』

橋本　正・上野　章・神保孝造（1974）『富山県福光町、城端町立野ヶ原遺跡群　第二次緊急発掘調査概要』

橋本正（1973）『直坂遺跡発掘調査概要』